318
269

始

昭和[illegible]四月十四日

現代兵營の裏面

新兵生活

池田極外著

東京陸東書院藏版

318—269

帝國圖書館藏

新兵生活

池田極外著

大正
2. 10. 14
内交

p. 220

序

極外と余とは竹馬の友なり、曾て中學に在るや、極外も余も共に一方の餓鬼大將なりき、苟しくも學校に於て騷動染みたことあらんか、極外の姿を見ざれば必ず余の影ありき、極外と余とは其の餓鬼大將たるに於て影の形に從ふが如かりき、唯極外と余の異る所は極外が敎場に於て一方の雄たるに反し、余は僅かに運動場の一角に於てのみ覇を唱ふるに過ぎざりしことなり、余は喧嘩口論、賄征伐、小使退治に於て人後に墜つるを恥ぢ、常に端棒(はしぼう)を擔ぎたりと雖も、敎師の面前に於ては輪講の廻り來るを鐵拳以上に恐れ、恰かも廿日鼠の如く小さくなり、窮甚しきに至れば時として机の下に潛り込み、辛ふじて敎師の眼を逃れ得、吻と一息安堵せしこと屢々なり。

極外に至りては卽ち然らず、敎場に於ける彼の雄姿は運動場に於て部下の鼻ッ垂

し小僧を指揮すると同一の武者振を見せたり、彼は悠然として教師の面前に立ち、時として教師を凹ますこと屢々なりき、机の下に潜ると教師を凹ますと、今云へばさほどの大事件ならずと雖も、その時分には甚だ重大のことならずんばあらず、況んや教師を凹まして赧然たらしめ、紅顔得意の微笑を浮べつゝある極外を見し我等の羨望や察するに堪えたらずや。

その後極外は余等餓鬼大將を遠く後に振り捨てゝ自ら其の地歩を開拓し、職を中學に奉ずること無慮十年に垂んとす、今年六月余が眞岡に至るや余を迎へし者の中に極外あり、故人邂逅相遇ふて歡ぶこと甚し、舊を談ずる盡きず、恰かも當年の餓鬼大將交際なり、されど紅顔の美少年は今や一個の偉丈夫、曩の餓鬼大將は今赳々たる陸軍の將校なりと聞く、尤も未だ大將に至らざるは勿論なりと雖も、然れども平の一兵卒には非ざるなり、彼が適くとして可ならざるなき才氣の煥發や驚くべし。

余彼に問ふに『怎うだ、君を凹ますやうな當年の極外は居ないか』を以てす、極外得意の笑を洩して曰く『這個な偉い學生が居るものか』と

極外は他を凹ますを知りて未だ凹まさるゝを知らざるものゝ如し、笑んぞ然んや彼もまた軍隊に在りて大に凹めるものゝ如し、而して彼が大に凹めるの告白錄は卽ちこの書なるなからんや。

軍隊は社會の一別乾坤なり、余は全く之を知らず、唯極外の彩筆に由りて趣味ある軍隊の生活を知るを得。轉たこれに入るを得ざりしを悲しむのみ、余は運動場の雄なりき、若し軍隊にあらば或は極外を凹ますを得たるやも知るべからず、されど今は詮なし、僅かに極外の軍隊談を聽いて徒らに羨望の感を抱くのみ。

彼は何處に於ても余等が健羨の的となる、思へばよい月日の下に生れた男と謂つべし、之を序とす。

大正二年秋九月

大住嘯風識

はしがき

兵營生活は左程苦しいものではないのである。眞面目に且要領善く渡りさへすれば、決して苦しい生活では無いのである。併し、要領が惡かつたり、不眞面目であつたりすると、とんだ痛い目を見るのである。其他の肉體上の痛苦の如きに至つては、苟も日本男子の口にすべき事では無い。君の爲國の爲に健全なる五體を捧げる事の出來るのは、吾々極東日出國男兒の一大快事でなければならぬ。たゞ、平常安逸な生活に馴れて居た者が、何等の覺悟も無く何等の用意も無く、苦しい所だらう位に考へて入ると、驚いて眼を廻はすのである。何事でも、其眞相を明かにしてかゝれば、左程に驚く事は無いものである。僕の此拙

作が、幸に將來君國の爲に戟を執つて立たんとする勇者の參考となり、同時に、曾て祖國の爲に其貴重なる肉體を捧げし諸君と共に、苦しかりし當時の記憶を追想して自負の快感に頰笑む事が出來たならば、著者の幸福は之に過ぐるものが無いのである。

大正二年九月

著者識す

兵營の裏面

新兵生活目次

一　是から入營……一
二　騷がしき一夜……八
三　入營當日(一)……一二
四　入營當日(二)……一七
五　兵營の第一日……二五
六　宣誓式……二九
七　鷲沼伍長殿……三三
八　べえ辯で學科を敎ふ……三七
九　見習士官殿……四二

一〇 戰友同志……四六
一一 狆が胡椒を甜めたやうな顔……五〇
一二 舍內當番、練兵……五三
一三 上等兵の靴磨……五八
一四 不動の姿勢……六一
一五 橫面をぴしやり……六六
一六 拷問同樣だ……七四
一七 學科……七九
一八 上等兵のお小言……八五
一九 各種の練兵……九〇
二〇 酒保へ……九四
二一 酒保商人の暴慢……九八
二二 斯の如き者古兵也……一〇三
二三 熊のやうな手……一〇八
二四 餡麭麵は洋袴へ……一一三
二五 上官の氏名……一一七
二六 部屋の中が往來……一二二
二七 金で買つた星章……一二五
二八 精神的苦痛……一三〇
二九 公德心なき古兵、痛快なる制裁……一三三
三〇 將校の一喝……一三七
三一 上官は檻の獅子……一四二
三二 喧嘩の關係者……一四七
三三 情ある少尉……一五一

三四 不時點呼……一五六
三五 食器番……一五九
三六 生半かな江戸辨……一六四
三七 汚い食器洗ひ……一六九
三八 新兵の敬禮……一七三
三九 皿屋敷のお菊……一七七
四〇 軍隊は盜賊の仕合……一八二
四一 入浴……一八六
四二 主從二人……一九一
四三 砂を喰はせる犬の糞の復讐……一九五
四四 上等兵大に怒る……一九八
四五 勅諭讀法……二〇三
四六 己ら意地が惡いだよ……二〇七
四七 「三千米突」へ行かう……二一〇
四八 妓夫曰く「未來の將校！」……二一五
四九 不平の勃發……二一九
五〇 血稅に對し特權を與へよ……二二二
五一 遠吠の稽古……二二八
五二 頭痛の一日……二三一
五三 友の手紙……二三四
五四 醫務室へ……二四〇
五五 余は島國根性を誇とす……二四五
五六 練兵休二日……二五〇
五七 練兵休に懲る……二五四

五八　火箸の紛失……二五六
五九　野外演習……二六〇
六〇　豆腐と丘阜……二六四
六一　駈足の刑……二六九
六二　兩親へ手紙……二七三
六三　顔を一週間も洗はぬ……二七七
六四　上等兵人を驚かす……二八〇
六五　送金の受領……二八四
六六　初めて西洋料理……二八七
六七　考科表の材料……二九一
六八　木彫の五百羅漢……二九四
六九　捧げ筒を三十分間……二九九
七〇　中隊長の小言……三〇三
七一　私物檢査……三〇七
七二　犯人の無記名投票……三一一
七三　新兵の正月……三一五
七四　濠の中へ墜落す……三一九
七五　二十六年度の徵兵……三二四
七六　軍紀强壓病……三二八
七七　友の訪問……三三一
七八　召集解除……三三五

目次終

兵營の裏面

新兵生活

池田極外

一　是から入營

「歡送一年志願兵小池誠一君」と墨痕鮮かに大書した數旒の旗を先頭に、親類、朋友、知己其他町内有志の一群に取繞れて街々を練り歩いた時は、僕も納り返つて居たが、萬歳々々の聲に送られて、兩國停車場を出發する時には、有繋に急に氣が滅入つて了つた。

車内は入營する壯丁と、其附添人とで可成り混雜つて居たが、自分の知て居る顔は一人もない。唯だ氣の毒な御兩親が、一人子の僕を案じて、停車場までゝは物足らず、兵營まで是非に送つてやらうと被仰つて、僕と一緒に雜閙の中に腰をかけて居

られるだけである、――僕は知らぬ世界に一人で行かねばならぬ。

僕は室の中に居る一人々々を觀察し始めた。鳥打を被つて襟に黑毛糸の襟卷を卷き着けた者、中折帽を阿彌陀にして縞の羽織を着た者など、其服裝は一人々々異つて居るが、大概は皆職人や土方の樣な顏貌の者ばかり。大抵は鴻ノ臺か習志野、遠くて下志野の野戰砲兵聯隊に入營するのであらうが、僕の行く佐倉の連中も矢張り此樣な强さうな奴等ばかりだらう、恁んな荒つぽい奴等と一緒に成つて駈足をしたり、銃槍をしたり、時には六七貫目もあらうと云ふ重い脊嚢を脊負つて十里も十五里も行軍しなければならないかと思ふと、僕は今更に腕の細きを慨まずには居られなかつた。

其中に僕の右の方に起つて居た二六八九の職人體の男が、〈忘舌を使〉て滔々と辯じ出した。

「己達の入營した時分にやそりや酷いもんだつたせ。何て言つたつて三年兵の奴等

は皆日清戰爭に行つて來た奴等ばかりなんだつたから、鐵砲玉の下を潛つて來たんだとかばりで、矢鱈に威張り散らしやがつて、新兵と見ると親の仇か何ぞの樣に苛めやがるんだもの。其癖日清戰爭なんざ、日露戰爭に比べて見りや丸で兎追ひ見た樣なものだつたんだ相だ。朝なんざ暗い中に起きて自分の靴と古兵の靴とを星明りで磨んだが、寒中だから堪らないや、指の先なんざ宛で冷たいのだか熱いのだか解りやしない。顏を洗ひに行つて折角水を汲み上げりや、古兵の奴等がちよいと横から手を出して取つて了ふ。恁んな風に汲み上げても汲み上げても取られて了つて、其中に不時稽古が始まるので、自分は到頭洗はずに終ひになつた事が何遍もあつたもので、一度なんざあ、是や尤も惡まれて居た兵隊だつけが、一生懸命汲んで居る間に、自分の班の古兵が其洗面器を穩して了つて、知らん顏をして居るのさ。さあ當人靑〈成つて探したが有る筈がない。僕は見て居たのだから知らせて遣りたかつたが、後の祟が恐いから知らせることが出來ないや。可哀相に其兵隊曉に責められ

るが恐さに、恰ど其日が日曜だつたものだから外出したまゝ逃亡して了つたが、間もなく自首して何でも二月許り監獄へ入れられたつけ。何か一寸失策が有つても直ぐに寢臺を擔がせたり、總びんたを食はせたり、それは〳〵一晩だつて安心して寢られた事はありやしなかつたものだ。それから比べりや今なんざ樂なもんさ。人間が怜悧に成つて居るから那樣な野蠻な眞似はしやしない。」

以前の男の前には、是れも同じ樣な風體をした男が三人、熱心に謹聽して居る。辯士は猶言葉を續ける。

「軍隊にや要領つてえ事がある。其要領せえ巧く使やあ榮外樂な所さ。何でも上官の言ふ事あ、腹ん中あ何うでも善いから、唯表面丈ではい〳〵と言つて居るんだ。さうして餘計な口は一口も利かねえ樣にするんだ、さうせえすりやあ間違ひつこはねえや。一度上官に彼奴は正直な奴だつて見込まれたら、もう後は占めたものだ。些と位ゐ悪い事があつたつて大目に見て呉れるが、其代り初めに狡猾い奴だと睨まれたら最後、善い所は見て呉れないで、悪い所ばかり見られるから堪らないや。最初二月許りが一番大切だ。入つたらまあ確かり遣んねえ。」

僕は此話を聽くと、曾か自分の家に出入をして居た男が、罰として寢臺の下を潜らせられたり、喫壺の水を飲まされ損つたと言ふ話を想ひ出した。何でも三十臺許列んで居る寢臺の下を、端から端迄潜らせられるのだ相な。其も立つた儘大手を振つて歩けるのなら何でもないが、匍ひ突張つて、寢臺の足に張つて有る太い棧を一つ一つ越えて埃だらけな板の間を膝行するのだから、其苦しさは一通でない相だ。喫壺の水は殺されても飲むまいと決心したので、到頭飲まずに濟んだ相だが、其代り酷く擲られた相だ。「隊では野蠻な體罰は堅く禁じてあるのだ相だが其にも關らず斯な亂暴な眞似をする。それも全く自分の横着から爲た事なら諦も付くが、二度共全く自分の不注意から起つた事で、自分は全く氣が着かんで居たのだ」と言つて、非常に憤慨して居た。

「それぢや將校に訴へて遣れば善いのに。」

と言へば、

「駄目でさあ、將校に上申したつて。奴等の叱られるのは口丈で、其代り私共には一層酷い意趣返しを遣りますから。結局階級が下ぢやあ逆も敵ひつこはありませんや。」

是ぢや犬の糞の敵か蚤の糞で取る樣なものだ。恁樣事を思ひ出すと、僕は何となく嫌な氣持に成つた。

恰度舟橋を過ぎた時に、僕の前に立つて居た男が、

「津田沼はまだ餘程先でしやうか。」

と僕に尋ねた。

「津田沼は確か此次だと思ひましたが、君は習志野へ入營されるのですか。」

「はあ。」

「ぢやあ騎兵ですな。騎兵は隨分骨が折れる相ですせ。お國は何方ですか。」

「川越在です。……何でせうか入營したら三年間は家へ行く事は出來ないのでせうか。」

「左樣ですなあ。近けりや休日に歸る事も出來ませうが、遠いから六ケ敷でせうなあ。兵隊には外泊と言ふ事が出來ませんから。」

「左樣すると其間に親が病氣なんぞに成つても駄目でせうかねえ。」

「親の病氣は別です。親の危いと言ふ時や、親の死んだ時は、一週間の休假が出る筈です。」

「左樣でせうか。」

と彼は稍安心した體で有つたが、それでも何處となく淋し相に見えた。體格は立派だが、柔和し相な男である。

僕は此男を見て、非常に氣の毒に感じた。

「此男も自分の様に一人子なのだらう。而して家には年を老つた兩親が殘して有るのだらう。服裝も餘り立派でないから、大方金持ちやあるまい。家に殘つた兩親は嘸困る事だらう。氣の毒な事だ。一體全體徵集の方法が誤つて居る。世間には金持で子供が澤山有る奴等の倅が、却つて補充だの籤逸れだのに成つて、それで大手柄でも爲たやうに得意がつて居やがる。金持だの紳士だのと言はれる奴等こそ、國民の模範と成らなけりやならないのだから、籤も何も要るものか、どしどしと徵集して遣るべしだ。」

恁んな事を思つて居る間に汽車は津田沼に着いた。前の男は丁寧に叩頭をした。僕は慌てゝ帽を取りざま衷心から此憐れなる勇者に向つて一層丁寧なる敬意を表した。

二　騷がしき一夜

間もなく佐倉に着いた、黄昏時である泊るべき宿を求めねばならぬ、併し何處の旅人宿に行つても人で一杯だ、何々郡壯丁宿舍と言ふ札が何れの旅人宿にも貼られて居る、僕は、是ぢやあ一年志願兵宿舍と言ふのがあるだらうと思つて探し廻つて見たが、そんな札の貼つてある宿屋は一軒も無い。段々暗くなる、自分は構はないが、兩親が大きな包を下げて心配して居るのが氣の毒で堪らない、仕方がないから親子三人往來中で相談を始めた。

「お父さん何うも困りましたなあ、何うしたら善いでせう？」

「左樣さなあ、小さな宿屋ぢやあ迚も駄目だから、一番大きな宿屋へ行つて、何處でも善いから寢かして貰ふより他はあるまい。」

成程其より他に仕方はない、そこで僕は直傍の大きな唐物屋へ飛び込んで、此町で一番大きな宿屋は何處かと尋ねると、

「此先の横町の米金と言ふ宿屋が一番大きいのですが、貴方も矢張明日御入營です

か。」

「左様です。」

「けれども今晩は込み合つて居ますから迚も何の宿屋も駄目でせうよ、若し行つて御覽に成つて駄目でしたら、狹くはありますが、手前共へお出でなさいまし、決して御遠慮にや及びませんから。」

滿更御世辭ばかりでもない様である、僕は篤く禮を述べて敎へられた通りに行つて見た、成程是迄見た中では一番大き相だが、併し矢張何とか郡の宿舍に成つて居る。

「今後一晩だけで善いが泊めて貰へまいか。」

と言ふと

「御氣の毒様ですが、此通りですから。」

と言ふ。

「いや此通りは解つて居るがね、實は僕も明日入營するので、一年志願兵の宿舍が無いかと思つて探して見たが、皆何々郡ばかりで困つて居るんだ。」

いから寢かして呉れまいか。親子三人路頭に迷つて居るんだ

すると主婦さん急に樣子が變つて、

「おほゝ、それは本當にお困りでせう、それぢや何卒。此方は駄目ですから、此横町の入口からお入り下さいまし。」

僕は此女將の豹變は、確かに一年志願兵の効果だと思つた。

横町へ廻つて見ると、和洋御料理米金樓と言ふ瓦斯燈が點つて居る。此處だなと思つて門を潜つて入つて見ると、女中が既と出迎へて居た。

「何卒此方へ。」

と言ふ案内に從いて座敷へ通つて見ると却々立派だ。

「驚きましたなあ、今夜は危く野宿をする所でした、入營も爲ない先から野宿の稽

古は些と念が入り過ぎますからねえ。」

諧謔一番、先づ兩親の願を解かせた。三人樂しく膳に着いたが、併し是きりで暫らく三人揃つて箸を執る事が出來ないのだと思ふと何となく悲哀な思が籠る。

「身體を大切にして、無事に勤め上げて來て吳れよ。」

との兩親の言葉も、平時は老の繰言と、平氣に聞き流して居たが、今夜に限つて何となく浸々と腸に染み渡る。寢ても却々寢付かれない。表二階には、何々郡の壯丁共が大騷をして居る、俗歌を謳鳴る者、情歌を唸る者。今宵を限と騷ぎ立てゝ居る、馬鹿な奴等だ。

三　入營當日

翌日は愈々入營の當日である。今日からは四民の代表者と成つて、銃を擔ひ劍を執つて國家保護の任に當るのだと思ふと、自ら一種の自負心も起り、身體も何とな

く引き締る樣な氣がする。犬糞攻の事などは全く忘れて了つた。入營は午前九時。

町へ出ると「壯丁は皆練兵場に集合すべし」と言ふ掲示が出て居る。徵に應じた壯丁共は、幾團にも成つて、役場の書記らしい男に引率されて、ぞろ〳〵と練兵場へ繰り込む。僕も仕方がないから、其一團の後に跟いて行つた。佐倉の町は蛇の、たくつた樣に東西に長い町である。練兵場は其西端に在る。高い臺の上で、南には廣い水田が有つて、其水田の先には又高い丘が在る。好い眺だ。西は森に遮られて解らないが、北も亦一帶の低地で、北向ふに亦丘がある。一帶の景色が變化に富んで居るので僕は尠なからず嬉しく感じた。青山の練兵場の樣な平凡な所で練兵するよりも、何れ位愉快な事か判らぬ。

練兵所の中にはまたもや、例の何々郡壯丁の建札が何本も立つて居る。そして各郡の出身者は、各々其屬する建札の傍に集つて行く。此で僕は再。一年志願兵集合場なる建札は無かと探した、然し其樣な札は一本も立つて居ない。僕は何だか厄介

者扱にされて居るやうな氣持が仕た。練兵場の東端の一本の大きな松の木がある。僕は仕方が無いから其根に腰を卸した。兩親も並んで腰を掛けた。其處へぞろ〳〵と五六人集まつて來た。聞けば皆一年志願兵だと云ふ。僕は其の中の一人に向つて、

「吾々は一體何うしたら善いのでせう?。」

と尋ねると、

「今聞いたら此松の木の下に待つて居ろと言はれました。」

と一人が答へた、是でまづ差當り落着く所が解つた。猶續々と集まつて來る。

其中に曹長が三人遣つて來て、「一年志願兵の方は自分を呼んだ人の方へ行つて下さい、」と言つて、三人が別々に名を呼ぶ。三人ばかり不參者が有つた。

三組の松の木黨の中、僕は最初の組に入れられた。組が定まると、各曹長は各自に自分の呼び上げた組を連れて、兵營の方に出懸けた。兵營は練兵場の西北方に在

るが、木立に遮られて屋根丈しか見えない。僕は自分の組と一緒に、曹長に引張られて兵營の中に入つた。四角な、豆腐に窓と屋根とを附けた樣な建物が幾棟も立つて居る。構内は奇麗に成つて居るが、何となく趣味に乏い。何々郡は先に來て最早和服を軍服に着代へて居る。僕の組は其等の建物の或一つの前に來て止つた。前を見ると、莚の上に古服と帽子とが幾組も擴げて有る。すると例の曹長が、

「此中で何れでも身體に合つたのを着て下さい。」

と言ふ。僕は、軍隊では階級が上だと箒棒に威張るものだと聞いて居たのに、大變丁寧な言葉使ひをする曹長だと思つて聊か奇異の感に打たれた。茲で愈々家から着て來た縞の新式の背幅に別れを告げて、金釦の軍服を着るのだ。奇麗で、身體に適た服を着け度と思ふのは一般の人情である。此場合僕も亦此人情の要求する所に從つて、彼れか是れかと選擇をしたとて敢て咎むべきでもあるまい。けれども僕は全く失望せざるを得なかつた。何れを取つて見たつて、滿足なのは一つもない。上衣

は、袖の先に繼ぎ足しがしてあつたり、腰の所に接がしてある。洋袴は膝や尻に補が當つて居る。而も其接や補に使つてある羅紗が、時代の違つた布なので色が違つて居る。兩親も一緒に成つて心配して見たが、何うも思ふ樣なのは無い。會に些し許り良いのがあつても身體に合はない。殊に都合の惡い事には。自分の組の人數丈しか揃へて無いので、思ふ樣に選る事が出來ない。仕方が無いから諦らめて、比較的自分の身體に適つて居ると思ふのを取つて止めた。其中に一人、非常に肥滿した男が居て、容易に合つたのが見付からない。丈が餘り高く無いので、太さに於いて合つたのを取ると、長さに於いて吊合はない。それで非常に困つて居たが、それも何うにか間に合はせた。洋服は身體に合はせて造るものだとばかり思つて居た僕は、場合に依つては自分の身體を洋服に合はせなければならない事もあると言ふ事を發見した。お坊ちやん育ちの僕等には。此發見は頗る有益なものであつたと言はねばならぬ。

漸と仕度が出來上ると、今度は上等兵が、「己に隨いて來い」と言ふ。少し言葉が亂暴だ。僕は、身分が惡いと矢張り言葉使迄下品なんだらうと思つて、少なからず此上等兵を輕蔑した。併し此觀察は全く間違つて居たので、それは後で解つた。此時僕は兩親の居ないのに氣が着いて、方々見廻すと、丁度廣場の中央に、附添人接待所が設けて有つて、其處に一人の髯を生した將校が、高い所へ上つて手に袋見た樣なものを持つて、何事か說明して居る。其周圍に大勢人が集つて居る。僕は其人集の中に自分の兩親を見附けた。呼んだつて聽えない。其中に自分の組は歩き出したので僕は其儘隨いて行つた。

四　入營當日

僕の組は直ぐ前の兵舍に引き込れた。入口に第三中隊と書た札が懸つて居る。入口で靴を脫がせられた。兵舍の中は板の間である。兵舍が古いので板の面は菊明石

を見る樣に、一面に小さな穴が明いて居る。それでも拭き込んであると見えて光澤がある。併し靴を脱がせる程奇麗ぢやない。僕は、自分の勸めて居た會社の板の間はもつと奇麗だつたが、それでも靴の儘上らせたのに、斯んな汚ない板の間を、何も靴を脱がせるにも及ぶまいと思つた。併し理窟を言ふ譯にも行かない。それから、くの字形に成つて居る梯子段を上つて、左に折れると部屋がある。其入口に志願兵斑と言ふ札が張つてある。僕は此部屋だなと思つた。

部屋の中へ入ると、木製の寢臺が、板壁に沿ふて列んで居る。一樣に赤い毛布が掛けて有つて、其先端から雪白の敷布が露出して居る。すると上等兵が

「寢臺の前に、皆お前方の名札が掛かつて居るから、各自で探してくんろ。」

と言ふ。僕の寢臺は向つて左から二番目に在つた。部屋は横に狹長くて、長さが六間許に幅が二間許である。其部屋から板壁一重隔てゝ、直ぐ次の部屋に續いて居る。而も其板壁が九尺程截られて、隣室との通路が出來て居る、併し戸も何も閉たない、

全くの開放しである。善く考へると、此部屋と隣の部屋とで、六間〻六間の大きな室に成つて居て中間の板壁は寢臺配置の都合上設けられたものであると言ふ事が解つた。

寢臺の後の板壁には棚が張り出して有つて、其上に古服が二三着。四角に疊んで乘せてある。其傍には茶椀と箸とが置いてある。棚の下には古靴が二足と、麻の袋と、ゲートルが二足掛けてある。僕はぼんやりして見廻して居る間に、上等兵は何處からか古靴を澤山持つて來て、

「さあ、此中でお前方の足に合つた靴を一足づゝ取つてくんろ。」

と言ひ乍ら、どさりと板の間へ投り出した。何れも是も酷い靴許りだ。茲に於に僕は、足を靴に合はせなければならない事に成つた。併し動物の足は、各自皆天賦の形狀大小を具へて居るので、靴の大小に從つて容易く其大小を變化せしむる譯には行かない。出された靴は皆大きなのばかりで、僕の足にはずぶずぶだ。僕も是には

閉口して、

「もう少し小さいのはありますまいか。」

と尋くと、

「軍隊ぢやハア、左樣自由にやなんねえだよ。いまちつと經つと、お前方には新しい靴が下るだから、夫迄辛抱するだ。大は小を兼ねると言ふだから、小さいよりも好かんべえ。」

と言ふ、僕は、此上等兵は口の利き方は粗末だが、大變豪い事を知つて居る男だと思つた。

今度は上等兵が棚の下に吊してある麻の袋を外して來て、

「皆此方見るだ、お前方の棚の下にある此麻の袋、こりや雜囊袋と言ふだ。此中を開けると種々の物が入つて居るだ。」

と言ひ乍ら、口を開けて中から所謂種々なものを寢臺の上に曝け出した。中から出

たものは、刷毛が三つに、靴墨が一箇に、小さな麻の袋が一つ。栞の樣な恰好をした長さ五寸程の薄い板の、一端に大きな孔が明いて居て、其孔から他の端の近く迄、狹い溝の穿つてあるものと、眞鍮磨の小さな罐とが一つ宛。上等兵は一つの刷毛を執つて、

「是が靴刷毛」

今一つのを取つて、

「是が羅紗刷毛。靴刷毛は毛が皆黑いが、羅紗刷毛の方は此通り白い條が入つて居るから、直ぐ分るだ。」

と說明して、更に今度は、神棚の御神酒德利に挿してある御神酒口の樣な恰好をした刷毛を取つて、

「是が三角刷毛。是で靴墨を溶いて靴に擦り附けて、それから此靴刷毛でギユーギユー磨くだ。」

上等兵は丁寧に其方法を實際に行つて見せた。それから更に桑の樣な板を執つて、

「是が釦磨板、此大きな孔の方から一つ宛釦を入れて、」

と言ひ乍ら、自分の上衣の釦を二つ許り入れて見て、

「斯う言ふ風に送つて行くと。釦は五つとも此溝の中に入つて了ふから、さうして

から此磨粉で磨くだ。是は毎朝遣らなけりやなんねえのだ。」

今度は麻の小さな袋を取つて、

「是が燕口袋、此中には裁縫の道具が一切入つて居るのだ。」

と言ひ乍ら其袋を開けた。袋は西洋封筒の樣な形をして居る。中から出て來たもの

は、赤坊の玩具の樣な、棒を五段に縒つて、各段に白だの赤だの黑だのゝ糸を少し

づゝ卷き附けたものと、梳櫛の樣な齒の錯んだ櫛と、小さな鋏とが出て來た。上等

兵は其絲を卷いた棒を取つて、

「是が錐絲卷。赤白黑の順に絲を卷くのだ。それから恁う言ふ風に回すと、」

と言ひ乍ら、其棒を捻ると、柄の上部と段の基部と漸次に分れて、棒は全く二つに

成つた。見ると柄の上部に錐が着いて居る。錐は今迄糸卷の中に潜れて居たのだ。

「ほーら、錐が出たゝんべえ。今度此方の方を回すと、」

と言ひ乍ら、更に錐の柄の末端を回すと、末端は柄から離れて、柄の中から針が二

三本頭を出して居る。

「ほーら、針が出たゝんべえ。是からハア、服が綻びたら是で縫ふだ。鋏も茲にあ

る。それから頭に頭垢が溜つたら、此櫛で掻くだ。」

それから、棚の下に掛けてある靴は換靴と言ふので、平常穿く靴が傷んだ時に用

ひるのだと言ふ事や、「ゲートル」は麻脚袢と言ふのだとか、襯衣ズボン下の事は襦袢

袴下と言ふ事や、羅紗服の事を襦衣袴と言ふんだ、などゝ言ふ樣な事を敎へてく

れた。僕は軍隊では奇妙な名稱を用ひるものだ、襯衣やズボン下の事を襦袢袴下だ

なんて殊更に和名で言ふなら、軍服の事も序に社杆と言つたら善さ相なものだ と思

つた。

今の説明で一通は解つたが、僕は、燕口袋なる意味が解らない。何故あの袋を燕口袋と云ふのだらう。是は字を尋ねたら其譯も自ら解るだらう。斯う思つたので僕は急に其文字が知り度く成つた。僕は解らない事があると何んな些細な事でも放擲つて置けない性分である。そこで僕は、

「先程のあの燕口袋と言ふのは、何んな字を書くのですか。」

と尋いた。すると上等兵は、非常に六ケ敷い顔をして、

「己あハア、お前方の樣な學者ぢやねえだから、何んな字書くか知んねえだ。」

此時僕は此上等兵の顔を熟く見た。眉毛と髪の生際との間が非常に狹くて、鼻は西洋茄子見た樣な恰好をして、唇が過度に薄くて、頤が飛び出して、顏面積が縱に狹くて横に幅い。宛で舶來の佛林狗の樣な顏だ。骨相學上から委しく調べる迄もなく、一見其低能なる事が解る。先刻は馬鹿に豪い事を言つて嚇かしたが、此顏ぢや

迚も燕口袋は解りつこはないと思つた。併しそれにしても、「お前方の樣な學者ぢやない」は餘計だ。吾々の樣な學者でない事は自ら言ふ迄もなく、顏の相好が疾から裏切して居ると思つて、心密かに可笑しく感じた。

五　兵營の第一日

それから今度は、寢臺のくつ付き合つて居るのが戰友で、戰爭に行つた時に一方が死んだら、一方の者が其骨を拾つて遣るのだとか、平時も互に助け合はなければいけないとか言ふ樣な判り切つた事も敎へて呉れた。僕の戰友に成つた男は加藤と言ふ横濱の男で、見るから實こさうな男だ。けれども僕は濱の者と聞いて初手から餘り信用してかゝらなかつた。

左う斯うして居る間に、僕の兩親も加藤の附添人も上つて來た。僕の父親は、將校から聽いた話の大要を僕に話した。其話に依ると軍隊は非常に有難い所である相

である。將校は附添人に對して、次の如き意味の演說をした。

「斯うやつて、皆樣方の大切な子弟をお預りしたのであるから、決して粗末にはしない。軍隊では暇を見て普通の敎育もするから、全然文字を知らない者でも、除隊になる迄には手紙位は書ける樣にして進げる。また小使は一ヶ月一圓二十錢づゝ給與されるから、決して家から送る必要はない。若し送るとしても一ヶ月二圓より多く送つてはいけない。それも中隊に當てゝ送つて遣こせば、中隊から少しづゝ渡して遣る樣にするから、中隊に當てゝ送る樣にして、決して直接當人に送つてはならない。」

猶其上に例の雜囊袋迄出して見せて、軍隊では此通り行屆いて居るから、決して針一本でも買ふ必要は無いと言ふ樣な事迄丁寧に且くど〳〵と說いて聽かせた。附添人は是を聽いて非常に喜んだ。殊に老つた婆さんなどは、涙を流して感謝して居た相である。

其中に晝飯が來た。誰が運んで來たのだか、知らない中に持つて來てあつた。吊臺の樣な形をして居る臺の中に、長方形をした飯箱が十一箇と、菜を盛つた皿が十一皿入つて居る。埃だらけの中に蓋も何もしてない。僕は、軍隊と言ふ所は亂暴な所だ、是ぢや三河町の立ん坊と選ぶ處はないと思つた。それから各自に、飯箱と皿を一づゝ取つて、室內に備へ附けてある大きな、而も汚ない食卓の上に載せて、棚の上から茶碗と箸とを取り出してバク附き始めた。所が飯箱の穢なさと言つたら、餌箱を見る樣で、緣は虧けて隅には黴の痕が黑く附いて、加之一種の臭氣がある。飯は七分三分だか四分六だか、何れにしても引割の量は少なくない。此食器にして此飯では我慢にも食べられたものぢやない。菜は、見懸けは却々立派である。カツレツといんげんのきんとん、それに、蓮根の白煮が二た片れ、紅薑と、牛蒡の煮物とで、材料は却々豊富なものだが、其カツレツの硬さと言つたら、宛で木片を嚙む樣で、顎顴筋と咀嚼筋とが膨れ上る樣だ。

僕は少し食べると最早胸が充満に成つて、匆々に止めて了つた。湯は閼伽桶の中に這入つて居るのを、小さな竹杓子で茶碗に汲んで飲むのである。要するに總てが不潔極まるものだから、僕は實に堪え難い感に打たれた。始終是ぢや迚も生命が續くまいと思つて、聊か心細く成つて來た。飯が濟んだ時分に、隣室へ入つた新兵が來て、食器を集めて運び去つた僕の兩親も加藤の附添人も、是で大丈夫だから歸らうと言ひ出した。留めて置く譯にも行かないから。僕は單に

「左樣ですか。」

と言つた。併し是では何だか物足りない樣な心地がしたが、別段此場合言ふべき言葉も無かつたので、其丈にした。兩親は猶細々と種々の注意をして、加藤に向つては何分宜しく賴むと言つて出て行つた。加藤の附添人も加藤に何か細々と注意した上、僕に向つて何分宜しく賴むと言つて出て行つた。僕は、誰の親も同じ樣に子供の事を心配するものだと思ひ乍ら、窓から顏を出すと、恰ど兩親が僕の洋服や靴を

包んだ布呂敷包を下げて二階を見上げ乍ら歸つて行くのを見た。僕は思はず

「達者で居て下さい！」

と呶鳴つた。兩親は頻笑み乍ら一寸顏を傾げて行つて了つた。

六　宣誓式

午後の一時になると、是から宣誓式があるから、一同中庭に集まれと言ふ命令。外へ出るには靴を穿かなくてはならない、けれども只穿いては脫げ相でいけない。そこで僕は工風を廻らして靴下を三枚穿いた。そうしたら幾河か穿き善く成つた。中庭へ出ると、兵舍の前に赤い毛布をかけた卓が置いてある、新入の兵隊は其前へ四角に列ばせられた。他の兵舍の前も同じである。暫くすると立派な髯を生した將校が出て來た。見ると大尉である。其後に中尉が一人少尉が三人特務曹長が一人、都合六人附隨して居る。其曹長は先刻練兵隊で僕等を呼び上げた男である。上等兵

は眞面目な顏をして大尉に敬禮をしたが、大尉は見向きもしなかつた。

大尉は卓の前迄進むと、じろりと一同を見廻して嚴かな聲で、

「今から宣誓の式を行ふ。」

と言ひ乍ら何たか書いたものを執り上げて讀み出した。

「軍隊は皇威を發揚し國家を保護する爲に設け置かれたるものなれば……」

是丈は僕にも解つたが、後は迚も覺え切れなかつた。何でも箇條書に成つて居て、軍人は忠義を盡さなければならんとか、上官の命令には服從しなければならないとか、剛膽でなければならないとか言ふやうな事が六箇條あつた。

大尉がそれを讀み終ると、志願兵の一人を呼び出して、總代として宣誓をさせた。呼び出された志願兵は大尉の前へ行くと、大尉の讀んだ書物を渡されて、此處を讀めと指で示された。志願兵は言はれる儘に紙を執り上げて、

「右の條々誓つて違背致間敷候」

と讀み上げた。それから一人々々順々に出て行つて、各自の姓名の下に拇印を捺させられた。それが濟むと大尉は嚴かな口調で、

「汝等は今から愈々帝國の軍人に成つたのである。汝等は今十二月一日を以つて軍隊に產れ出たのである。是から汝等は萬事上官の注意を受け其命令に服從して、立派な軍人とならねばならん。汝等は今迄地方に在つて、不規律な生活に馴れて來たので、軍隊の如き規律正しい生活は、暫らくの間は苦しいかは知れんが、慣れて了へば却へて愉快なものである。總て班長上等兵の指揮に從つて、善く帝國軍人たるの本分を盡し、皇威を發揚し國家を保護することを心懸げて、帝國軍人たるの名譽に背かんやうにせねばならん。」

と言ふ意味の訓示をした。それから上等兵が引率して、營內の各所を案內して呉れた。是が聯隊本部、是が大隊本部、是が酒保、是が入浴場、是が便所と、殘る隈なく敎へて呉れた。就中入浴場は最も遠くて、且中途に可成長い坂がある。營內全部

を見終つたのは、恰ど三時半頃。室に歸ると上等兵が志願兵一同に對して、

「是から己がお前達の係り成つたんだから、其積りで善く遣つて呉んろ。今も中隊長殿が言はれた通り、お前達は今日から軍隊へ生れ出たんだから、地方に居ちや何んなに豪いか知んねえが、軍隊ぢや赤ん坊だ。己はあ何にも知んねえだが、軍隊ぢやお前達の上官だ。宣誓式の濟まねえ中は何でもねえだが、宣誓式が濟んだゝから、馬鹿でも何でも仕方がねえ、己がお前達の上官で、お前達は己の部下だから、其積りで遣つて呉んろ。」

と言つた。一同は「何分宜しく願ひます。」と言ふより他はなかつた。僕は家に居た時、軍隊では上等兵が一番威張るのだから、其機嫌を害はないやうにするが可いと言はれて來たので、仕方なしに皆と一緒に、「宜敷願ひます」と頭を下げた。併し肚の中では情無い事だと思つた。家に居た時分には、此尊い頭は、親と先生とに向つてばかり下げるのだと思つて居たのに、會社へは入つて先づ重役やマネージャーに

頭を下げさせられ、今度は軍隊へ來て、恁んな男に迄頭を下げさせられる。僕は何だか、學校を出てから却つて人間が安く成つて行くやうな氣かした。自分は是でも鐵砲の持ち方も知つて居る。廻れ右も知つて居る。中學校と高等學校とで兵式の一通りは遣つて居る。時には小隊長に成つた事もある。何も今更恁んな上等兵を先生として、事新しく習ふ必要もあるまい。成る程軍隊に入つたのは今日が始めてだが、習ふ事は疾うに知つて居ると思つた。

七　鷲沼伍長殿

暫くすると、伍長が一人軍服のポケットに兩手を入れて、草履をべた〳〵曳ずり乍ら入つて來た。それを見ると上等兵が、途方もない大きな聲で「ッケー」と呶鳴つた。皆は何の事だか解らないので、キヨロ〳〵して居る。すると件の伍長は

「其儘でえゝ、其儘でえゝ。」

と、頗る横柄な事を云ふ。すると再上等兵が、前の様に大きな聲で、

「休めえ。」

と言つた。僕は直ぐ今の號令を了解した「ッケー」と言ふのは「氣を着け」の事で、「休めえ」は「休め」の事だなと思つた。それにしても、軍隊に於ける伍長は、豪らしい勢力を以つて居るものだと思つた。

「何うだ、軍隊は面白い處だらう。是から漸々種々な事を覺えると、野外演習や何かで隨分面白い事があるぞ。行軍なんぞに行つて宿舍に泊ると、兵隊さん兵隊さんと言はれて、馬鹿に持てるもんだ。」

と伍長が言ふ、僕は此男も隨分人を馬鹿にした事を言ふ男だ。第一今日入つたばかりの者に軍隊が、面白いか面白くないか解るもんか。宣誓式の時には、今日始めて軍隊へ生れ出た赤ん坊だと言はれたぢやないか。此男だつて聽いて居たらう、生れたばかりの赤ん坊に、面白いか詰らないか〻解る筈があるものか。「兵隊さん」とし

て持てる事なんざ眞平御免蒙むる。己はそんな安つぽい男ぢやないと思つた。僕が恁んな事を思つて居る間に、伍長は一人々々身分と職業とを尋ねて居る。大抵は中學を卒業した丈だ。中に三人高等の學校を出た者か居る。一人は國井と言ふ男で早稻田の法科出身。一人は阿部と言ふ男で、高商出身。一人は山本と言ふ男で、高等工業出身。伍長は僕に向つて

「お前は何學校を出たのか。」

と尋ねたから、

「文科大學を出ました。」

と答へると、

「何?、文科大學?、そんな大學は何處に在る?」

と質ねた。僕は危く吹き出さうとした。それから更に、

「本郷の帝國大學の英文科です。」

と説明すると、

「うーむ赤門の事か。それぢや早く左樣言へば善いのに。」

と伍長先生「赤門」と言ふ一種の固有名詞を使つて、得々として居る。

「だけんどなあ、軍隊ぢやあ幾何學問が有つたつて駄目だからな。まあ一年間は死んだ積で居なけりやならねえだ。」

伍長は猶此他に二三の注意じみた事を言つて、出て行つた。上等兵にも二三の注意を與へたが、其注意の間、上等兵は不動の姿勢で、「はつはつ」と應へて居た。伍長が部屋を去らうとした時、上等兵はまた「ッケー」と言はうとしたが伍長が、

「其儘、其儘」

と言つたので止めて了つた。伍長が出て行つた後で、

「今來られたのが、已達の班長殿で鷲沼伍長殿と言ふだ。」

と上等兵が説明して呉れた。それから格別仕事がないので、皆親戚や朋友に遣る手

紙を書き出した。僕も皆と同じ樣に何枚か書いた。

八　べえ辯で學科を敎ふ

五時に成ると、喇叭が鳴る、何の喇叭だか僕には解らない。すると上等兵が、

「右翼から三人來う。飯取りに行くだから。」

と言つて、自分の寢臺に近い方から三人連れて出て行つた。暫くすると、窓の下で、

「志願兵、志願兵。」

と呼ぶ聲が聞える。何事かと思つて僕と加藤とが窓からひよいと首を出して見ると、先刻出て行つた志願兵の一人が、飯箱を何本か兩手で抱えて、窓を瞰上げて叫んで居る。何事だと尋くと、誰か下迄降りて來て、これを受取つて呉れと言ふのだ。それから僕が降りて行つて受取つて遣つたが、可成重い。

「何うでしたね？」

と尋ねると、

「やあ酷い處ですよ。其中君も行くから解りますがね。宛然魚河岸にでも行つた樣でさ。彼方へ行つても此方へ行つても劍突許り喰はされましてねえ。眞實驚いて了ひました。それに其箱が只十本許しかないんですがね、途中迄來ると腕が拐げ相になるですよ。」

と言ふ、僕は格別烈くも驚かなかつた。其中にまた、

「志願兵。」

だ。今度は菜が來たのである。菜は飯臺に乘せてあるから一人では駄目だ。それで加藤と二人で取りに降りた。

僕の寢臺は中庭に面する窓の側にあるので、下から呼ばれる度に降りて行かなければならない。迷惑至極だ。

夜食は晝食とは又一段劣惡である。てんで話に成らない、皮も剝かない牛蒡の斜

に切つた奴を、醬油だか水だか解らない樣な汁で煮込んだものに、例の引割飯。菜の端に萎びた澤庵が一片あつたので、僕は其を菜に十口程食べて止めた。飯が濟むと、先に飯を取りに行つた三人が、食器を集めて例の飯臺で運び去つた。其後で上等兵が、

「さあ是から皆で室内を掃除するだ。それには順番に舍内當番と言ふのを定めるから、其當番に當つたものが、室の入口に置いてある桶に水を汲んで來るだ。それから寢臺をほつ立てゝ、茲に懸つてゐる箒で室内を綺麗に掃いて、其跡を雜巾掛に掛けてある雜巾ですつかり拭くだ。それから舍内當番が其塵埃と水とを捨てて來るのだ。で今食器を持つて行つたのが、食器當番。それと舍内當番を、皆で毎日交代に遣るだ。今夜は今食器を持つて行つた者の次の二人が舍内當番になるだ。國井志願兵と野間志願兵、二人で裏の井戸に行つて水を汲んで來るだ。」

國井と野間とは水を汲むために出て云つた。殘つた者は、片端から寢臺を引き

てた、其の跡を帚で掃く、其塵埃を塵取に取る、其中に水が來る、代り〳〵に雑巾をかける。其が濟むと、當番は水と塵埃とを捨てに行く。其間上等兵は自分の寢臺に腰を掛けて、面白さうに眺めて居た。僕は、上等兵が羨ましくなつた。掃除が悉かり濟むと、何がさて是迄雑巾掛なんぞ夢にも爲た事のない手合ばかりだから、互に顏を見合はせて、口には出さないけれど、眼と眼で酷い目に遇つたと語り合つた。其處へ食器當番も歸つて來た。是も何だか驚いた樣な顏をして居る。

「其中に暗く成つたので、上等兵は室の隅に置いてあつた角燈に點火すべく、舍内當番に命じた。舍内當番は命に從つて點火したが、何處に置いて善いのか解らないので、

「此食卓の上に置いて善いのですか。」

と上等兵に質くと、

「うむ。けれど軍隊ぢやハア、それを食卓なんて言はないだ。「ターフル」と言ふだよ。」

と言ふ答だ。「テーブル」でも「ターフル」でも善さ相さものを。

燈火が點いたので皆其所謂「ターフル」の周圍に集まつて堅い腰掛の上に腰を卸した。十二月の一日だと言ふのに暖爐も無くて、加之下が板の間と來て居るのだから足の冷えること夥しい、皆肩をすぼめて、燕が電線に並んで止まつたやうに成つて居る。見合はす顏が新しいので、互に遠慮し合つて碌々話もしない。すると上等兵が。

「是からちつとんべえ學科を遣るべえ。」

と言ひ出した。僕等は皆驚いた顏を上等兵に向けた。彼は得意然として說き出した。其要旨は、軍隊には尊稱と言ふものがあつて、上等兵以上大佐迄の尊稱を「殿」と言ひ、少將から大將迄が「閣下」皇族が「殿下」であると言ふことと、同輩は呼捨にしなければいけないと言ふ事だ。そして其終に、

「是から皆が己を呼ぶ時には、上等兵殿と言ふだ。」

とにこ〳〵し乍ら附加へた。それから尙、軍隊では地方と違つて、「私」の事は「自分」「左樣で御座います」は「左樣であります」と言ふのだと敎へて呉れた。學科だなんて豪さうな振出しだから、廣んな事かと思つたら、何だ馬鹿々々しい。人を嚇かすにも程があると僕は思つた。

九　見習士官殿

暫くすると、廊下の方でがたりがちやりと、靴と「セーバー」との音が聞える。皆一齊に耳を聳てた。上等兵も穩かならん樣子で入口の方を窺つた。音は次第に近接いて來る。最後に其音が最も高く室内に響き渡つた時には、音の主は早此室の入口に其アウトラインを現はした。皆一齊に振り返つて好奇の眼を光らしたが光線が弱いので明瞭に見る事が出來ない。唯室の入口に近い處にある太い柱の陰の朦朧たる四角な空間の中から、五箇の金屬釦が微かな螢光を反射して居た。文章に書く斯長

くなるが、併しアウトラインが現はれて、皆が振り返つて、而して其螢光を認むる迄に至つた時間は、極めて僅かなものであつた。其瞬間、實に其瞬間に突如として、

「オール」

と言ふ、叫びに似た聲が起つた。それは上等兵の聲であつた。而も其聲たるや實に全兵舍に響き渡る樣な聲であつた。見ると上等兵は、宛で棒でも呑んだ樣に眞直に立つて居る。是を見た一同は、殆んど直覺的。否寧ろ本能的に立ち上つた。アウトラインは更に數歩を室内に運んだ。靴の音とセーバーの響とは、アウトライン其者の如くに近附いて來る。

「休め。」

アウトラインの聲は頗る沈重なるものであつた。

「休め――――。」

是は上等兵の聲である。併し大きいばかりで奥行がない。是と同時に一同がガタガ

タと席に着くと、アウトラインは食卓の一端、上等兵の腰を掛けて居る反對の側に其嚴かなる風姿を現した。最早アウトラインではない、一箇の完全なる人物である。僕は上等兵と同じ側面に居たので、明瞭に認める事が出來た。肩章は曹長のと同一であるが、右の襟に一箇の星章を附けて居る。腹部の眞中に金色のバックルが輝いて居る。右手に握れるセーバーの柄は、將校のそれと同じである。此諸點より觀察して、僕は直ちにそれが見習士官なることを看破した。

「上等兵。」

見習士官は、嚴かな聲で呼び掛けた。すると上等兵は、言下に、

「はつ。」

と應へて起立した。

「上等兵は既う志願兵へ敬禮の方法を敎へたか。」

「未であります。」

「敎へもしないのに今の樣な號令を掛けて何うする。ぼや〳〵しては不可。善し休め。」

上等兵は席に着いた、僕には、今のぼやぼやと言ふ言葉が解らない。併し前後の連絡から考へて見て、何うしても善い意味の言葉ぢやない。何でも「慌てるなとか」ぼんやりするな」とか言ふ意味の言葉だらうと思つた。

「志願兵。自分は命に依つて皆の敎育掛に成つた、見習士官岡崎健次郎と言ふものである。就ては先刻中隊長殿からも言はれた通り、皆は軍隊の事は全く無經驗の事であるから何事も上官の命令に服從して行かなければいかない。軍隊は地方と違つて、何事にも軍規秩序と言ふ事が主である。縱令皆は、地方に在つて何んな地位に在つても、軍隊へ來て、筋を一本着けて居る間は、他の者は皆汝等の上官である。決して地方に居つた時の心を出してはいけない、殊に皆は未來の將校であるから充分注意して他の者の模範とならなければならん。

見習士官の注意は、遉がに伍長や上等兵などの注意とは違つて、餘程重みがある。それから種々學問上の事など質問して、三十分程過ぎると出て行つた。是は可成話せる男だと僕は思つた。

一〇 戰友同志

見習士官が出て行つた後で上等兵は、

「なーんだ、漸と士官學校から出て來やがつたばかりだのに、大きな顏を爲やがつて」

と言ひ乍ら、首を縮めて、狆の様な顏から赤い舌を出した。何う見ても下劣だ。

僕は、此上等兵は何處迄馬鹿なのだらう、何も知らない田吾作や李兵衛ならば知らん事、苟も吾々の前で斯んな卑劣な誹謗を試みたつて、些とも自分の價値は揚りやしない、却つて自分の愚を暴露するばかりだ。恁んな奴が上等兵に成つて威張つて居る様では、日本の軍隊も未だ〳〵幼稚なものだと慨嘆した。すると横濱の男が、

「上等兵殿。自分が地方に居りました時分に、若い士官なんぞよりも、却つて上等兵殿や軍曹殿などの方が、實際にかけちや勝れて居ると言ふ事を聞きましたが眞實でありませうなあ？。」

と、阿諛だか冷笑だか解らない問を呈した。すると上等兵先生、滿面喜色で溶けて了ひ相な顏をして、

「左様ともよう。」

と言つた。僕は肚の中で、此男嫌に要領を使ふ奴だ。斯んな奴に限つて油斷の出來ないものだ。飛だ奴と戰友なんぞに成つたものだと思つた。すると、寢臺の後の羽目をこつ〳〵と叩く音がする。上等兵は、

「小池志願兵。班長殿が呼んで居るから、行つて何だか聞いて來う。」

と言ふ。僕は殘念だが仕方がない、命に從つて班長殿の部屋に行つて見た。班長室は入口の直ぐ左にある。戸を開けて入ると。例の鷲沼先生、

「上等兵に此室へ來うと言へ。」

と言ふ、馬鹿々々しい、會社の社長だつて斯んな失敬な言葉は使はないと思つたが、仕方がない。またもや命に從つて、右の趣を上等兵に復命すると、

「左樣か。」

と言ひ乍ら上等兵は出て行つた。其後で互に顏を見合はしたが、言ひ合はした樣に微笑が浮んだ。併し何う言ふ意味の微笑だか解らない、少なくとも、僕の微笑丈は殆んど無意味で、自身にも如何なる種類の微笑だか解らない。此場合心理的に解釋する餘裕などは勿論なかつた。上等兵は何を言はれて居るのか、却々歸つて來ない。唯折々鷲沼の大きな聲が戸外に漏れて來るばかりだ。志願兵は互に會話を交換し始めた。大抵は前の晩旅宿に窮した話である。中には、何々郡に割込まれて、終夜殆んど眠る事が出來ないで困つた者もあつた。

暫くすると、僕の向側に腰を掛けて居た、國井志願兵が、僕に話しかけた。

「君、おつと、君と言つちや可けないのだ相でしたねえ。併し今日始めて會つたばかりでは、呼捨も少し亂暴ですなあ。いくら何でも、餘り禮儀を失し過ぎる樣ですからなあ。」

「いや構はんですよ。何うせ一年間は苦樂を共にせにやならないんですからねえ。」

「其も左樣ですなあ。時に君は今迄何を遣つて居られたですか。」

「ウエルソン商會の文書課に出て居ました。」

「左樣ですか。それぢや越山と言ふ男を御存知ぢやないですか。」

「えゝ知つて居ます。君もあの人を御存知なんですか。」

「えゝあれは僕の同窓ですよ。中學時代の。」

「左樣ですか。」

「彼奴も前に志願兵を遣りましたがね。途中で足を折りましてねえ。除隊になりましたつけ。隊に居た時分善く僕の下宿へ來て、溢して居ましたが。何でも初めの中

は左程でもないですが、漸々酷しく成る相ですよ。」

「左樣ですかねえ。」

其から皆で盛に……併し小聲で、食物の講評を始めたが、其所へ上等兵が歸つて來たので話は腰斬されて了つた。

一一　狆が胡椒を甜めたやうな顏

上等兵は、何を言はれて來たのか頗る不平な顏をして居る。狆が胡椒を舐めた樣な顏付である。僕は、是は屹度、加藤があんな事を言つたのに、「左樣ともよう」なんて言ふ返事をしたので、其が聽えて叱られたのだらうと思つた。暫くすると上等兵が、「班に居る時、氣を着けとか直れとか言ふ號令がかゝつたら何をして居ても直ぐ不動の姿勢を執るのだ」と言つた。それから時計を出して見て、

「最う直點呼だから、最う一度掃いて、舍內當番はそれを捨てゝ來う。」

と言ふ。それから又皆で掃いた。尤も此時は寢臺は上げなかつた。暫くすると、喇叭が鳴る。上等兵は、

「集れー。」

と言ふ號令をかける。皆一列に列んだ。

「番號ッ」

と言ふので、右翼から一、二、三、四の番號を付ける。番號が終ると、

「休めー。」

と言ふ。此位の事は誰も知つて居るので失策るものはなかつた。隣室でも同じ事を遣つて居たが、何が扨昨日迄鋤鍬持つて居た田吾連の事だから、容易に治りが着かない。先づ寢臺の順に列ばせて、それから不動の姿勢を執らせて、番號の付け方を敎へて、いざ「番號」と言ふ號令を掛けると、慌てゝ同じ番號を繰り返す奴があつたり、十五位返滿足に行くと、十六と言ふ番號を付けべき奴が、間誤ついて十八な

んで番號をつける。容易な事ぢやない。其中に鷲沼先生、相變らずポケットに兩手を入れて、草履をぺたつかせて遣つて來た。上等兵殿大きな聲で、

「ツケー。志願兵室總員十一名。現在員十一名。番號ッ。」

と號令する。志願兵が十番返番號を付け終ると、上等兵は、

「自分共、異狀ありません。」

と、鷲沼先生に復命する、鷲沼先生、「うむ」と點頭いたばかりである。間もなく靴とセーバーの音が梯子段を上つて來て直ぐ傍の班に入る。すると、「オール」の聲が起つて次で番號の聲がする。幾度か「もとい」を喰つて漸と濟むと、今度は、此方の部屋へ入つて來た。すると鷲沼先生、

「オール。志願兵室總員十二名。現在員十二名。番號ッ。」

だ。其態度と言つたら、宛で埴輪の人形を見る樣だ。僕は一寸横目で見ると、人員檢査に來たのは、茶褐服を着けた將校で、手に赤い筋の入つた馬上提灯を下げて居

る。其後に下士が一人隨行して居る。番號が濟むと、將校は一渡り皆の顏を提灯で照して見て、其儘次の室へ行つた。隨いて來た下士は、上等兵に窓の開閉の度を注意して後、是も次の室へ行つた。次の部屋でも無論番號は一度では濟まなかつた。

一二　舍内當番、練兵

偖是で寢るばかりである。僕は便所へ行かうとして、帽子を被らずに出やうとしたら、上等兵から劍突を喰つた。軍隊では、一寸でも兵舍の外へ出るには、必ず帽子を被らなければいけないと云はれた。上着と袴は棚の下の釘に懸けて、襦袢袴下の儘で、狀袋の樣に成つて居る毛布の中に、足から漸々に押し込んで行くのである。隣室の或兵隊は、頭から先に入れ樣として、皆から大變笑はれた。

間もなく消燈喇叭が鳴る。餘韻嫋々と靜かなる兵營に響き渡つて、末は星の世界へでも消えて行くかの樣である。舍内當番は、一應室内を見廻つて燈火を消した。

寒天の星は窓硝子を徹して、きらきらと輝いて居る。僕は寢乍ら其を見て、子供の時「ナショナル」で習つた星の詩を思ひ出した。星を見て其詩を想ひ出したのは此時丈である。夜具の勝手が違ふので却々眠られない。種々な事を考へる。併し纏つた考は一つも起らない。唯、一日も早く除隊の日が來れば善い。三百六十五日とは餘りに長い。まあ其迄無事で居られるだらうか。是ぢや三年も居なけりやならないものは、何んな心持だらう。其に比べりや自分なんざ何でもないのだが、迚も人の想に迄は成り切れない。此に於て、僕は恁う言ふ眞理を發見した。

「人間が他人の事を思ひ遣つたり、他人の苦痛と自己のとを比較して、自身の苦痛の比較的輕いことを感謝したりする事の出來るのは、未だ自己に多少の餘裕が殘つて居る間か、若くは自己の苦痛が過ぎ去つて、他が未だ其苦痛を續けて居るのを見た時かの事である。何と言つても人間は終極の點に行けば、必らず『自己』に歸着する。世間の倫理學者は種々勝手な理窟を立てゝ居るが、然し、いざと言ふ塗炭場に

立つて見なければ駄目である。恐らく、ショウペンハウエルだつて、僕と同じ境遇に立たしたら、却々他人の事を思ふ所ではない、早く自分丈でも自由の身に成り度いと思つたであらう。希臘が未だ國運隆盛で皆泰平の夢に醉つて居た間は、國家とか社會とか言ふものを行爲の標準として居つたが、一朝其國家が他國の爲に壓倒されて、國民が昔の樣な太平を夢る事が出來なく成つてからは。矢張りストイックとかエピキユラズとか言ふ樣な、個人を基礎とする倫理說が起つて來たぢやないか。」

隣室の兵隊は大概寢着いたと見えて、大分鼾の音が聞える。何だか寢言を言つて居る者もある。今日新に入營した數百の壯丁は、皆夢の世界に遊んで居るのだらう。昨夜はあんな馬鹿騷をした奴等も軍規と言ふ重い壓板に壓し着けられては、ぐうの音も出せないで居る。僕は熟々個人の無力なるを感じて「ホッブス」の國家主上主義も一面眞理を含有して居るわい、などと考へ乍ら何時の間にか寢て了つた。

* * * * * * * * * *

翌朝になると、喇叭が鳴る。而も人々を夢の國から此現實の奮闘世界に呼び戻す勇ましい起床の喇叭である。すると上等兵が床の中から、

「兵隊等、起きろー。」

と呶鳴る。今迄靜かであつた各班が急に騷然として來る。各自手早く軍服を着ける。日朝點呼があるから、皆自分の寢臺の前へ立てと言はれる。僕は餘り冷たいので迂濶手を「ズボン」の「ポッケット」の中へ入れて居たら、酷く上等兵から嚇かされた。間もなく昨夜將校に從つて來た下士が來た。上等兵は、人員の異狀なき旨を報告したのみで、日朝點呼は終つた。日朝點呼は簡單なものだ。それから上着の釦を一つ〳〵々々磨いて、顏を洗ひに行かうと思つて、金盥は何處に在るのだらうと仲間に聞くと、隣室と共同で三箇あるのだ相だが、皆持つて出て居ると言ふ。井戸端へ行つて見ると、黒山の樣に人集りがして居る。我先に吸まうと言ふので宛で修羅の巷だ。僕は情けない事に思つて見て居ると、新兵が折角吸み上げた水を、古兵の奴が横取

りする。尤も皆左樣ぢやなかつたが。僕は迚も是ぢや駄目だと思つて、不圖傍を見ると、井戸端に續いた洗面所兼洗濯場で、志願兵が一人顏を洗つて居る。普通の新兵は茶褐の小倉服を着て居るが、志願兵丈は絨衣袴を着て居るので、直ぐ解る。見ると國井志願兵である。僕は其水でも全然洗はないよりは增だと思つて、

「國井君、君洗つて了つたら、其水を僕に呉れませんか。」

と言ふと、

「えゝ、是で善かつたら、幾何でも使ひ給へ。」

と言つて、其水を呉れる事を承知した。

「君、能く汲めましたねえ。」

「えゝ、漸との思でしたよ。迚も柔和しく待つて居た日にや、何時迄待つたつて汲めやしませんよ。時に君、もう後三百六十四日になりましたねえ。」

國井は、顏を拭き乍ら恁う言つた。僕は稍吃驚した。此男はもう日勘定を始めた

のか知ら、隨分氣の早い男だ。一年が一日しか缺けないのに、日勘定とはちと早過ると思つた。

一三　上等兵の靴磨

顔を洗つて室へ歸ると、上等兵が、

「今日の舍内當番は何をして居るんだい！。」

と言ふ。僕は自分と加藤とが舍内當番である事を想ひ出した。

「はつ、顔を洗ひに行つて居りました。」

と答へると、

「左樣な事は言はなくつても解つて居るだ。此角燈を何うするだい。早く持つて行かなけりや、角燈當番が居なくなつて晩に燈火を點ける事が出來なくなるでねえかい。」

と嫌に皮肉な事を言ふ。僕は言はなくて解つて居るなら、聞かなくつたつて善さ相なものだ。持つて行けなら持つて行けで、早く左樣へ言ば解るのに、何處迄しみつたれた奴なのだらうと思つた。

「何處へ持つて行くのでありますか。」

と聞くと、

「知れ切つて居るでねえか、裏の角燈小舍へよ。」

成程左樣言はれゝば、昨日營内見物の折是が角燈小舍だと丈は敎へて呉れたが、其他に何等の説明も與へて呉れなかつたので、何んな角燈が藏つてある事やら、平常に使ふ角燈なのやら、特別營内に何事かあつた時用ふる角燈なのやら、一向明瞭な概念は與へられなかつた。然るに今朝に成つて、突然に室の角燈を持つて行けと言つたつて、そりや些と無理だ。知れ切つて居るでねえかと言つたつて、餘り善くも知れ切つては居ない。僕は咄嗟に恁う思つたが、併し理屈を言つたつて無駄だか

ら、其儘默つて持つて出た。加藤は顏を洗ひに出て、未だ歸つて來ない。角燈小舍へ持つて行くと、古兵が楊枝を使ひ乍ら、

「何故早く持つて來ないのだ。馬鹿つ。」

と嚇かされた。僕は熟々嫌だと思つた。嫌だと思ふと早く歸り度くなる。歸らうと思つたつて、滿期になる迄は迚も歸れない。學校なら退學も出來る。會社なら辭職も出來る。併し軍隊は左樣は行かない。何が何でも勤める丈は勤めなければならない。恁うなると、先刻國井志願兵の言つた、三百六十四日が生きて來る。月で數へるには虧目がない。虧目の出來たのは日である。然らば何うして三百六十四日と數へるより他はない。除隊迄には三百六十四日ある。三百六十四日經たなければ出られない。自分は何故樂しい學生々活を、早く逃れ度いなどゝ思つたらう。恁んな事なら二三年も落第すれば善かつたと思つた。僕は、一年を恁んなに長いものだとは、夢にも思つた事は無かつた。

班に歸つて見ると、加藤が上等兵から叱られて居る。後で、何で叱られたのかと尋くと、角燈の始末をしないで顏を洗ひに行つた爲だつた相な。併し其小言の最も重なる原因は、角燈の始末を怠つた爲では無かつたらしい。恰ど僕が歸つて來た時、上等兵は恁う言て叱つて居た。

「お前が昨晩あんな事を言つたものだから、己あ班長殿から豪あ叱られたゝ。」

是に由つて之を惟ふに、上等兵は矢張り昨晩例の一件で班長に叱られて、其腹癒せに今朝に成つてから、僅かな事をとつこに取つて加藤を叱つたのだ。是では犬糞的と迄は行かなくても、馬糞的復讐位には成つて居ると僕は思つた。それから差し當つて仕事もなかつたので、僕は雜囊を下げて靴を磨きに出た。他の兵隊も大勢磨いて居る。冷たさは冷たし、却々光澤は出す、困り切つて居る所へ、顏を洗ひに行つて歸つて來かゝつた上等兵が、

「小池志願兵、序に己のも磨て呉んろ。」

と言ひ乍ら、さつさと自分の靴を脱いで草履と履き換へて上つて行つて了つた。僕は困つた。自分の靴丈でも持ち扱ひ兼ねて居る處へ、更に一足、而も承諾も經ないで、勝手に押し付けて行つて了ふなんて、いくら上官だつて餘り沒道義だ。寧その事放擲つて置いて遣らうかとも思つたが、いや〳〵、左樣な事を爲て見たつて何にもならない。犬糞的復讐をされる丈愚だと思ひ返して、自分のを磨き終つてから上等兵のを磨き出した。

一四　不動の姿勢

傍を見ると、同じ仲間の鶴田と言ふ志願兵が、是も同じく靴を磨いて居る。僕は是を見て、此男が片方位磨いて呉れるだらうと思つて居たが、決して助けて遣らうと言ふ事を言はない。僕は助けて呉れと頼むのも剛腹なので、默つて磨いて居ると、鶴田は間もなく自分の靴を磨き上げて、知らん顔して行つて了つた。僕は此野郎隨

分不人情な奴だ。人が頼まないからつて、それを好事にして苦痛を分つ事を爲ないとは、惘れ返つた我利我利亡者だと思つた。朝食の喇叭が鳴る時分に漸と磨き上げて室へ歸ると、他の者は朝早飯を食つて居る。上等兵は有難うとも何とも言はない。僕は詰らないことだと思つた。朝食の菜は味噌汁丈で、例の閼伽桶の中に入つて居る。僕は棚から自分の茶椀を卸して、一杯汲み取つた。實は牛蒡の薄く切つたのである。美味くは無いが、昨日の晝から碌々飯を食はなかつたので、胃の要求が烈しい。從つて比較的餘計に食べる事が出來た。飯が濟むと、食器番は食器を返しに行く。僕は加藤と一緒に水を汲んで來る。雜巾掛をする。一渡り混雜した後漸と片附いた。其處へ食器番も歸つて來る。それから食卓の周圍に集つて煙草を吸ら、何うも洗面器が不足で困るが何とか出來まいかと言ふ動議が起つた。すると等兵が、仕方がないから三つばかり買ふが善からうと言ふ。買ふにしても我々曜以外に外出する事が出來ない。日曜迄は未だ六日ある、却々夫迄我慢は出來な

すると又上等兵が、中隊の將校の從卒をして居る古兵さんが、公用で外出するから、それに賴んで買つて來て貰へと言ふので、衆議が其に一決した。序に掃木が酷く成つて居るから、其を一本と、それから草履が無くて困るから、それも一緒に買つて來て貰はうと言ふ事に成つて、各自若干の出金をした。

午前八時になると、練兵が始まる。兵隊さんとは名のみで、未だ鐵砲も渡されなければ劍も渡されない。丸腰の儘で中庭に集まる。丸腰の兵隊さんは餘り調子の好いものでない。宛ど立ん坊にフロックコートを着せた樣で間の抜けたこと夥しい。是で頭から大きな太鼓を懸けさせたら、昔流行つたチャリネ麵麭屋宜しくである。

上等兵が整列させて番號を附けさせる。整列の順序は、寢臺の順序だ。其で都合よく身長の順序に成つて居る。暫くすると鷲沼伍長が出て來る。上等兵は志願兵に氣を着けを掛けて、鷲沼君に擧手注目の敬禮をする。次に昨夜の見習士官が出て來る。今度は鷲沼君が上等兵の遣つた通りの事をする。暫くすると、今度は見習士官

が「氣を着け」を掛けた。彼方でも此方でも氣を着けの聲が聞える。上等兵も伍長も皆不動の姿勢を執つて居る。暫くすると、遠くの方で「休めー」と言ふ。すると伍長が「休め」と言つた。

僕は見習士官の行つた方を見ると、中隊の兵舍の入口の階段の上に、カーキー服を着けた將校が立つて居る。其前に、岡崎見習士官と、今一人見慣れない見習士官が立つて居る。二人共不動の姿勢で將校に何か言つて居る。其中に將校が呼笛を鳴らして、「幹部集れー」と言ふと、彼方からも此方からも、下士や上等兵が駈けて行つて、將校の前に集まると、一齊に擧手をする。而もそれが言ひ合はせた樣に揃ふ。將校は一寸手を擧げたばかりだ。何の中隊の前にも、皆同じ樣な事が行はれて居る。暫くすると、話が終つたと見えて、一同は再揃つて敬禮をして、各自の團隊に歸つて來る。

鷲沼君が、

「是から不動の姿勢をやる。」

と言つたが、皆軍隊の規則に馴ないので上官に物を言はれる時に不動の姿勢を執る事を知らない。そこで鷲沼君は、

「、、もとい、、」

と言つて、更に其規則を敎へた上、

「氣を着け。是から不動の姿勢をやる。不動の姿勢は、……」

と、是から種々と不動の姿勢の説明をして、「自分が右翼から、上等兵が左翼から、一人々々見て行くから、自分か上等兵が前へ行つたら、直ぐに不動の姿勢を執れ」

と言つて、片手間隔の一列横隊に開かせた。

一五　横面をぴしやり

伍長は一番から順次に、上等兵は十番から順次に、其々直して行く。頓て上等兵

が僕の前へ立つた。

「九番」

僕は不動の姿勢を執つた。中學校に居た時能く敎へられてあつたのだから、直される所なぞあるまいと思つて居ると、何うして、

「右足前、ア、過ぎた〳〵。右足尖内、左足尖外、腰を引いて胸を着けて。兩手を自然に垂れて、左肩を下げて。腮を引いて、首を右へ起して。……よゝし、休め。」

と先づ斯んな鹽梅で、「可し」と言れる迄には容易な事ぢやない。誰も大概同樣だ。胸を着けろと言はれるのが僕には一番辛かつた。靴が大きいので、靴の踵は着いて居ても、足の踵と踵との間には、一寸程の隙がある。それで胸丈を着けろと言はれるのだから、容易な仕事ぢやない。一時は一生懸命に着ける事が出來ても、暫くすると自然に離れて了ふ。それを無理に着けて居やうとすると、總身から汗が出る。暫くすると、伍長が廻つて來る。今度こそは直されるものかと思つても、矢張り駄

目だ。而も前と反對の直され方である。僕は、伍長だの上等兵だのと言ふ奴は、何とか文句を附けなけりや、自分の威嚴に關するとでも思つて居るのぢやなからうかとも思つた。

一通り濟むと、今度は一人一人見習士官の前に呼ばれて、試驗をされる。此處でもまた種々と直される。暫くすると、また呼笛が鳴る。前の將校が「幹部集れ！」と叫ぶ。すると見習士官を始め上等兵迄前の通り將校の前へ飛んで行く。將校の前へ行くと、またもや前の通りに一齊に敬禮をする。敬禮が濟むと大方「休め」と言はれたのだらう、一齊に左の足を出す、如何にも善く揃ふ。宛で各個體の間に電線でも引いて、其に電流を通じて動作せしめる樣だ。僕は軍隊は規則の嚴ましい所だと聞いて居たが。善くも斯う揃つたものだと感心し乍ら見て居た。見習士官が行く時、志願兵に不動の姿勢の自習を命じて置いたのだが、皆忘れて了つて其方ばかり見て居た。將校の話が濟んで、見習士官が歸つて來ると、突然。

「志願兵は猾い！。自分が自習を命じて行つたのに、一人として命令通りにして居た者はない。實に不勉强極まる。汝等が左樣言ふ精神なら、吾々も其積りで遣るから左樣思へ！。」

と言ふ。僕は驚いた。自分は是迄不勉强呼ばりをされた事は一度も無かつた。學校の成績だつて決して著しく人後に落ちた事は一度もなかつた。會社でだつて精勤の名を取つて居た。然るに軍隊に來て而も僅々數分間の自習を怠つたばかりで、直に不勉强呼ばりをされるとは、些と平かなるを得ない。それも相當の報酬を得て、而も其報酬に應ずる丈の事をしなかつなのなら、何と言はれたつて、一言の申譯もないが、自分は全く献身的に服役して居るのである。將校の樣に俸給を受けて居る身とは違ふ。世間には兵役の義務に服さないものがいくらもあるのに、而も其等の者の中には、美酒佳肴に飽いて高樓に春眼を恣にして居るものも少なくはないのに、自分は恁んな檻樓服を着て、破靴を穿いて、寒中に手袋も穿めずに苦しい感をして

居るのだ。少しは察して呉れても善さ相なものだ。將校なんて言ふものは、毫も人間らしい同情心を持つて居ないものだと思つた。國家的觀念の修養に乏しかつた僕の考としては、實に無理もなかつたことゝ言はねばなるまい。

見習士官の小言が濟むと、伍長が、

「是から轉回及び右轉回をやる。皆休んで此方を見い。」と言つた。「右向け右」「左向け左」及び「廻れ右」の動作を説明してから、前の通り伍長は右翼、上等兵は左翼から一人々々遣らして見る。中學校や高等學校邊でやつてこそ、斯んな事は何んでもないが、それが專門の軍隊へ來てやらせられると、それは〳〵六ケ數い。やれ膝が曲つて駄目だことの、腰に反動を付けては不可い事のと、一動作を「可」と言はれる迄には、何遍小言を言はれるか解らない。僕は轉回に於いて腰に反動を附けてはいけないと言はれたのが、何うしても腑に落ちない。右へ向くにしても、左へ向くにしても、片足を僅かに上げて片足の踵で廻るのだから、只立つて居たつて廻れる

ものぢやない。必らず何處かで反動を附けなけりやならない。總て物體が運動するには、相當の力を與へられなければならないものだ。力が與へられなければ抵抗を利用する反動を求めなければならぬ。然るに片足を上げて、片足尖を浮かせて、力も與へられず反動も用ゐないで、唯其儘で廻れと言つたつて無理だ。第一物理の原則に背いて居る。いくら軍規が豪いたつて、物理の原則に迄背いて行動することは出來るものぢやあるまいと思つた。從つて僕は何うしても旨く出來ない。何遍言はれても、先づ些と腰を反對の方に捻つて、踵と地面との抵抗を利用して、然る後右なり左なりへ廻らなければ出來ない。伍長は八釜敷言ふ。いくら八釜敷言つたつて出來ない。伍長は「斯う言ふ風にやるのだ」と言て遣つて見せる。成る程旨く行く。併しいくら旨く行つたつて、何處かで反動を取るに違いない。けれども僕には其が解らない。伍長も亦其を説明しない。終に僕は堪え切れなくなつて、

「一體何う言ふ力で廻るのでありますか」と尋ねた。

すると伍長はづか〳〵と寄つて來て、

「何？ 力？ 恁んな事をするのに力なんぞが要るものかい。貴様は一體生意氣だッ！。」

と言ひ乍ら、大鷲のやうな手で横面をぴしやりと喰はせた。見習士官は冷かな眼で上等兵は侮蔑の眼で、共に僕の方を眺めた。

「貴様のやうな奴は、口で敎へたつて駄目だ！。善く獨りで考へて見ろ。」

と伍長が言ふ。僕は、物心ついてから此貴い顏や頭は、親にだつて先生にだつて打たせた事は無かつた。然るに恁んな物の道理も解らない匹夫野人に、而も何等理由なくして叩かれて、而も一言の辨正さへも出來ないと思ふと、總身の血液は唸りを立てゝ頭へ騰つて、一滴幾何と言ふ貴い涙と成つて涙管から溢れ出した。

「貴様口惜しいと見えるな？ 口惜しさや心を入れ更へて勉强しろ。」

と言ひ捨てた儘、伍長は右翼の方へ行つて了つた。休めとも何とも言はれないので、

僕は其儘不動の姿勢で居なければならなかつた。

暫らくすると彼は再僕の前へ歸つて來て、

「何うだ、解つたか？」

と訊ねた。解つたかと言つたつて、第一何を何う解つたら善いのかも分らぬ。僕は無理な質問をする男だと思ひ乍ら默つて立つて居た。

「こら！ 何故默つて居る？ 解つたかと言ふに!!」

些し劍幕が荒く成つて來た。僕は破れかぶれで、

「解りました。」

と答へた。すると伍長は、

「解れば可し、能く自修して居ろ。」

と言つて次へ移つた。僕は廓然として軍隊の要領なるものを大悟した。それから種々と工風を凝した結果、腰で反動を取ることを廢して、踵に對する地面の抵抗を利

用することを發明した。

再度伍長が廻つて來た時分には、僕は巧みに轉回を行ふ事が出來るやうに成つて居た。伍長は、

「それ見い、力なんぞ些しも要りはせんぢやないか。」

と得々洒々として居る。僕は、力と言へば直ぐに相撲でも取る時の力を聯想するより他、力の定義なるものに關して何事をも知らぬ伍長の愚を、心窃かに憐れまざるを得なかつた。

一六　拷問同様だ

合集解散が濟むと、今度は自然行進の歩調を敎へられる。例に仍て伍長が、

「今から自然行進をやる。休め、休んだ盡見て居ろ。自然行進は、先ず左の足から發進を始める。前へ進めと言はれたら斯う左足を擧げて、股を水平にして脚部を垂

直に下げ、足尖は力を入れずに斯う自然の儘稍下方に向かしめるのだ。それから、擧げた足を斯う前の方に下ろすと同時に、胸を眞直に伸ばして、足の裏を平に地面に蹈み着けるのだ。左の足を蹈み着けると同時に、今度は右足を擧げて左足と同じ動作を繰返すのだ。それから、足を運ぶ時に兩手は肩の高さに交互に振動するのだ。初めの中は手は出來る丈高く擧げる。續て行ふと、斯う言ふ風になるのだ。一二ッ一二ッ一二ッ一二ッ、えゝか解つたらう。さあ是から初める。氣を着け―。右向け―右ッ前へおいッ。」

「一二ッ一二ッ一二ッ」

「呼稱が低い。股を最と上げて。國井志願兵、膝が伸びない。鶴井志願兵、足を平らに蹈み着けて。一般に手を最と高く上げて。今度は右の方に曲れ。」

上等兵と伍長とは、馳けずり廻つて、膝の伸びない者の膝を叩いたり、足を平らに蹈み着けなれない者に小言を言つたり、宛然　家鴨の卵を孵化した牝鷄が、其雛

の水中に游泳するのを見てやきもき心配して居る有様に善く似て居る。併し僕は親切だとも有難いとも思はなかつた。列が曲ると、前の者が歩む有様が善く見へる。兩手と股とを交互に高く上げて進む様は、宛でダークの綾吊人形宜しくだ。兵隊と成るには、妙な歩き方迄稽古しなきやならないものだ。往來で恁んな歩方を爲様ものなら、直ちに抱引されて瘋癲病院へでも送られるだらう。僕は恁んな事を考へ乍ら、一生懸命に一二ッ一二ッと遣つて居ると、上等兵が側へ駈けて來て、蹈み出した足の膝をぴしやゝと叩く。調子に乘つて段々叩き方が酷くなる。先刻から不馴な足つきで、休みなしに歩かせられて居るので、足首や膝骨がくがくして來て居るのに、斯う調子付いて叩かれちや堪らない。僕は餘りの痛さに思はず下を見ると、伍長が見付けて、

「小池志願兵　何故下を見るか。行進中には決して下を見る事はならんぞ。」

と呶鳴る。是ぢや宛で拷問に掛けられて居る様なものだ。前の者の頸を見ると、毛

節を一本々々に傳つた汗が、帽子の切際で集合して、ポタリポタリと襟に落ちて居る。冬だと言ふのに、僅かばかりの時間歩いたばかりで、汗の滴が垂れる程だから、其歩行の性質が如何に苦しいものであるかが解る。彼是三十分も遣らせられたと思ふ頃、例の笛呼が鳴つた。運動は直ぐ中止された。

「十五分間の休憩。」

是は例の將校の聲である。僕はやれ嬉しやと思つた。すると伍長が、

「今止れと言はれて直ぐ、傍を向いたものと下を見た者があるだらう。手を擧げろ。」

と言ふ。と直ぐに二人手を擧げた。

「誰だ。官姓名を名乘れ。他の者は休め。」

二人共默つて居る。

「早く名乘らないか。」

伍長は噛み付く様に呶鳴る。僕には官姓名が何の事だか解らない。すると一人が

「青柳直太郎であります。」

と言つた。

「馬鹿ッ、それは汝の姓名だ。官姓名を名乘れと言ふんだ。解らないか。」

二人共依然默つて居る。すると上等兵が又おせつかいに、

「自分の官姓名を知らないで何うするんだ。貴樣達は餘程馬鹿だなあ。」

馬鹿だつて怜悧だつて、敎はらない事が解つて堪るものか。昔から、敎はらないで聖人に成つた人は、一人もありやしない。僕は心密に憤慨した。伍長は堪らなく成つて、

「解らなけりや敎へて遣る。官と言ふのは汝の官等で、姓名は名前だ。解つたらう。それだから、汝等の官姓名はと尋ねられたら、陸軍歩兵二等卒、何の某と云ふのだ。」

と敎へた。

「解つたら言つて見ろ。」

「陸軍歩兵二等卒、青柳直太郎。」

「陸軍歩兵二等卒、山本光。」

「ようし。左樣だ。二人は何故休めの命令の無い中に傍見をしたり下を向いたりしたのか。休めの無い中は何時でも不動の姿整を崩してはならん。是から決して忘れるな。一諸に氣を着け！、左へ正面。解散ー おい。」

一七　學科

斯んな小言で、貴重な休憩時間の大部分を潰された。皆煙草を吸はうとして、ポケットから卷煙草を取り出したが、多くは燐寸の用意がない。其中一人が、

「燐寸なら玆に有るぜ。」

と言つたので、喫煙家は皆其周圍に集まつた。

「何うです、隨分酷いですなあ。」

「左樣ですなあ。自然行進と言ふ奴は、一體ありや何です。宛で南洋土人の舞踏にでもありそうな型ですな。ありや自然行進ぢやない、不自然行進と言べきだ。僕は足首が痛くて堪らない。」

互に密々と恁んな會話を交換して居る。すると國井が、

「小池君、先刻は君は酷い目に會ひましたなあ。一體何うしたのですか。」

と尋ねた。僕は話すのも懶いと思つたが、

「結局誤解されたのです。僕は物理學上の「力」と言ふ意味で、何う言ふ力で廻るのですかと尋いたら、向ふでは筋力と取り違へて、妙に捻繰る奴と思つたのでせう、それで擲つたのです。」

と答へた。國井は、事件の動機に關する明瞭な概念は得られなかつた樣子であつたが、

「譯の解らん奴に出會つちや、堪つたものぢやありませんなあ。」

と、半慰藉的の語調で結んだ。すると青柳志願兵が、

「官姓名には間誤付いた。」

と言ふと、國井が、

「二等卒とは官名なのだらうか。さうとすると、文官の何に相當するのかしら。隨分可笑なものですなあ。第一僕等は普通の兵隊と同じに、矢張り二等卒と言ふのだらうか。」

と懷疑的言論を弄し始めた。此時見習士官が近着いて來たので、皆一樣に口を閉ぢて了つた。

「何うだ皆骨が折れるか、國井志願兵何うだ。」

と見習士官が尋ねた。

「はい、隨分骨が折れます。殊に自然行進には一番弱りました。」

「フ、ン。」

見習士官の應は是丈であつた。

呼笛が鳴る。將校が階段の上で、

「集れ！」

と手を揚げて居る。すると伍長が、

「一年志願兵集れ！」

と言ひ乍ら、右手を擧げて將校の方へ飛んで行く。皆吸ひかけの煙草を捨て、伍長の後に續いた。他の組でも同じ樣に、

「第一區隊集れ！」

「第二區隊集れ！」

「第三區隊集れ！」

と、各自に其屬する兵隊を集めて走つて行く。瞬く間に新兵は皆將校の前に集つた。將校は集つた兵隊を半圓形に列ばして、自分は其の半圓の中心に嚴然と立つて、

「休め。」

と言つたが、足の出し方が不揃だつたので、

「復い。……休めと言はれた時には一齊に足を出す。休め。……氣を着け。……休め。可し、左樣言ふ風にやるのだ。是から學科を遣る。」

と一渡り一同を見廻して、

「汝等が家へ手紙を遣る時。自分の住所を何と書いて遣るか。……木俣兵二、汝は何う書いて遣る。」

「……」

「こら木俣、返事をしないか。」

「はーい。」

「そんな返辭があるか。軍人は最と大きな聲で、短く明瞭と返辭しんん。木俣ッ。」

「はい。」
「汝は何う書いて遣るか。」
「はい。」
「返辭はもういゝ、今の問に答へて見ろ。」
「知りません。」
「知らない？　自分の居る所を知らないで何する。それでは、木内太郎右衞門汝は何う書くか。」
「はい、第三中隊と書きます。」
「何の第三中隊だ？　只第三中隊で解るものか。」
「はい、歩兵第三中隊であります。」
「駄目だ。他に知つて居るものはないか。手を擧げろ。」
質問の内容が餘りに馬鹿げて居るので、志願兵は皆、それが自分達にも與へられて

居るのだとは氣が着かなかつた。で誰一人として手を擧げる者がない。と今一人の方の見習士官が其を見着けて、
「おい、志願兵。貴樣等豪さうな面をしやがつて、一人も知つて居る者はねえのか。貴樣達は一體横着だぞ。」
と、如何にも皮肉な而も野鄙な言葉で詰りかけた。志願兵は吃驚して一度に手を擧げた。

一八　上等兵のお小言

然し將校は、そんな事には頓着なく、
「おい、汝答へて見ろ。」
と、手を擧げて居る一人の兵隊を指した。指されたと自覺した兵隊は、
「はい、歩兵第〇聯隊第三中隊と書きます。」

と大聲で答へると、

「可し、左樣だ。今の答解は大に善い。總て答解はあゝ言ふ風に元氣善く遣らなければいかん。木俣、今の通に言つて見ろ。」

木俣は相不變半間な聲で、

「はーい。……歩兵第三中隊、……第……聯隊であります。」

流石嚴然として居た將校も、此頓珍漢な答解には、思はず噴き出さゞるを得なかつた。

「木俣は駄目だ。班へ歸つたら、善く上等兵から敎はるだぞ。」

それから、忠君愛國と言ふことに就いて簡單な說明を試みて、それで學科は終つた。

學科が濟むと、前に敎へられた不動の姿整、轉回右轉回、及び自然行進の繰返しを遣つて、十一時になると午前の練兵は終りを告げた。

疲れ切つて室に歸つて、差し當り仕事がないので、一服吸つて居ると上等兵が、

「小池志願兵、今日は酷い目に遇つたなあ。」

と言ふ。僕は、一寸忘れた蟲齒の痛みを復もや揚子で突かれた樣に、暫時忘れて居た口惜しさが、再びむら〳〵と湧き上つて來たが、

「はつ、遇ひました。」

と、何氣なく應へた。

「そんだからはあ、己が言はねえ事ぢやねえだ。軍隊ぢやはあ、いくら自分が豪くたつて、地方の學問ぢや間に合はねえだ。何でもはあ、地方に居た時の心を全く捨てねえぢや損だ、小池志願兵は一體口が過ぎるだ。入營の日だつて左樣だ。「燕口袋つて何んな字書く」なんて、何んな字書かうと善んべえ、是が燕口袋だとさへ覺えて居りやあそんで善えだ。軍隊ぢやはあ其で澤山なんだから。己あの時隨分腹が立つたいけれど、入營したばかりだつたから、默つて居たい。早くそんな精神を捨て

ねえぢや、是から何遍鬢打を喰ふか知れねえだ。」

「御注意は忝けないが、些と御議論の的が外れて居る。いや軍隊では是が正しいのか知らないが、それでは私の理性が承知しない。中等教育より始めて、前後十有餘年間に養はれたる私の理性は、到底、昨日や今日入つたばかりの軍隊の規則習慣に依つて、全く打破し去らるゝ如き薄弱なものぢやない。燕口袋とは何う書くのか、回轉をするには如何なる力を利用するのか、是等の質問を試みたのが何故悪い。吾人の理性は決して是を惡なりとは判斷しない。また然く判斷されやうとさへも豫期しては居なかつた。」と僕が獨りで憤慨して居る間に、加藤は雜巾桶を持つて水を汲みに行つたが、重くて、迚も一人では階段を持つて上る事が出來ないので、僕を呼びに來た。僕は直ぐに行つて手傳つて持ち上げた。すると上等兵は其を見附けて、

「小池志願兵は何故戰友を援けないのだい？。加藤志願兵一人に水を汲ませて、お前は知らん顏をして居るのかい？。

皮肉も是に到つて極まれりだ。針を包んだ眞綿とは正に此事である。文學士も斯う成つては滅茶苦茶だ。

「加藤君、君行くなら鳥渡僕に知らせて呉れたら善いぢやないか。」

と恨めば、

「だつて君は上等兵殿から何か言はれて居たもの。」

「それぢや上等兵殿の小言が濟む迄待つて居て呉れゝば善いのに。」

「だつて何時濟むか解らなかつたのだもの。」

斯う言はれて見れば仕方がないが、併し是ぢや餘り卑劣だ。今朝の失策の埋合をして、上等兵の歡心を買はんとする心事が見え透いて居る。現在自分は其が爲に上等兵から皮肉られて居るぢやないか。それを辯解して呉れ樣ともしないのは確かに其心事の陋劣なる事を證明して居る。今朝の事件は自分の全く預り知らん所だ。否自分も同樣に小言を喰つて居る。彼は或は今朝の復讐を爲た積で居るかも知れない

が、さりとは餘り情無い奴だ。亦、自分の缺點の埋合に、戰友を售る樣な卑劣な行爲を氣が着かないで居る上等兵も情無い。僕は熟々軍隊を情無い所だと思つた。

晝飯が來た。牛蒡の煮付けに澤庵一片。甘くは無いが、昨日から碌すつぽ飯を食はなかつたので、何うやら飯箱に一杯食つて了つた。飢ては食を擇す……嗚呼

一九　各種の練兵

午後中庭に整列すると、練兵場に向つて自然行進と言ふ命令だ。練兵場迄は三丁程ある。其間を一二、一二と遣らせられて行くのは、決して樂な仕事ぢやない。霜解が酷いので道路が泥濘る。それに時々大きな石が飛び出して居る。其を踏み附けて足を痛くする。從つて自然に下を見て歩く樣になる。すると見習士官や伍長や上等兵やが、鵜の眼鷹の眼で睨んで居て、

「こら、下を見ちや不可！、眞直見て歩けッ。」

と、嚙み着く樣に呶鳴る。咽喉が疲れて呼稱が低くなると、

「呼稱が低いッ！。」

足が疲れて股の上げ方が低くなると、

「股が低いッ！、最と確かり上げろ。」

其他手の振方が低い事の、膝が伸びない事のと、劍突の絶間なし。そして、呶鳴られて確かり遣ると、

「貴樣等は狡い、出來る癖に遣らない。」

と言ふ。僕は、此狡いと言はれるのを一番辛く感じた。「狡い」と言ふ事は、最も卑劣なる精神の形容詞である。狡いと言はれる度に、自分が「如何にも卑劣漢だ」と言はれる樣な心地がする。自分は決して狡いのぢやない。一生懸命に遣つて居るのである。動作の鈍くなるのは、疲勞の結果無意識的に成るのである。小言を言はれて更に活潑に成るのは、鈍つた精神を刺戟されるからである。刺戟劑としての小言

は然る事乍ら、狡いと言ふのは餘り酷い。他人は兎に角、自分丈は決して狡い事はないと憤慨した。練兵場に着く迄に、しつとりと汗をかいた。

練兵場では、他の中隊の新兵も盛に練兵させられて居る。十二月の二日、風が無くて天氣の好い日である。ぽか〳〵と暖かい。南北の高地には麥が青々と延て居る。併し針葉樹の他は皆裸で、練兵場の草は皆黄色に成つて居る。春と冬とを一緒にした樣な景色である。練兵場に入ると、僕は直ぐに東端の一本松を見た。此松を見ると、嫌な氣持がした。家庭の愉快な安逸な生活が、その松の爲に截ち切られて居る樣な氣がした。その松から向ふが愉快な世界で、此方が不愉快な世界。その松が兩者の間の關守然としやつちよこ張つて、此方の世界に追ひ込んだが最後、一年間は理が非でも歸しは爲ないぞと、意地惡く力んで居る樣な氣がして、如何にも惡らしく感じた。其後も、此松を見る度毎に、定つて、此感が起つて日を經るに從つて益々深く成つた。

僕は尙數種の運動をさせられた。何れも是も皆習つたことのあるもので、改正された點だつて、極めて僅かであつた。けれども其骨の折れることゝ言つたら夥しい最初のうちは容易しい樂な運動をさせられたが、段々動作が混雜入つて來ると何うして〳〵一寸の油斷も出來ない。眞直にすべき關節が曲つたり、充分に曲ぐべき部分が伸びて居たりすると、一分一厘でも容捨はない。ぎう〳〵と矯正される、中には、家庭や學校に居た時分に、自墮落な態度を仕付けて來たので、姿勢が頗る不平均に成つて居る爲、隨分酷しい矯正を加へられて居るものもある。暫くすると呼笛が鳴つて、徒手體操は中止された。次はまたもや自然行進だ。自然行進と言はれると、僕は慄然とせざるを得ない。いや恐らく僕許ぢやあるまい。それが濟むと、不動の姿整、轉回右轉回など、午前に遣つた動作を繰り返して、偖十五分間の休憩と成つた。

二〇　酒保へ！

休憩が終ると、今度は發進及び停止の動作を敎へられる。「止れ」の號令が掛つたら、左足を踏み出して、活潑に右足を左足へ引き着けて止るのである。是丈の事は小學校の兒童でも善く知つて居る。併し軍隊では是丈では足りない。右足を引き着ける時、左足の膝が少しでも曲つてはいけないのである。何でも無い樣だが、是が頗る六ヶ敷い。强て曲げまいとすると、右足の引着方が不活潑になる。それから尙右足を引き着けた時に、其踵が正しく一線上に在つて、且足尖の開き方が四十五度の角度をなして、而も體は正しく發進前と同じ方向を向いて居なければならないのである。僕は、是は迚も不可能な事だ、造り着けた土偶を、其儘持つて行くのぢやあるまいし、生身の身體を動かすのだもの、いくら自分の身體だつて、さう型に嵌めた樣に出來るものかと思つた。併し何と思つたつて、爲ろと言はれるのだから仕

方がない。また上等兵や伍長が遣ると、整然と出來るのだから仕方がない。終に僕は、此點——自分が不可能だと思惟する事を、彼等が容易に實行し得ると言ふ點に於いて、聊か彼等を驚嘆する樣に成つて來た。そして斯んな目に遇ふのなら、學校で兵式體操を遣る時、最と眞面目に遣つて置けば善かつたと後悔し始めた。中學校や高等學校時代には、體操なんぞは全く馬鹿にしきつて、敎師が折角親切に注意して呉れた事も、馬耳東風と聞き流しにして居たが、其結果は思ひも寄らない所で芽を吹いた。結局、自分が犯した不眞面目と言ふ、不道德な行爲に對して、當然自分が負はなければならない結果なのだから仕方がないと思ひ諦めた。諦めたつて苦しい事は苦しい、只煩悶と言ふ精神上の苦痛が減少したのみである。實際、世間の多くの學生は、僕と同じ苦き經驗を嘗め且つ又嘗めんとして居るのである。

僕は入營の日、此練兵場を、非常に變化に富んだ愉快な所だと思つた。併し今日は全く失望せざるを得なかつた。昨日の愉快な所は、今日、其儘で苦痛の世界と變

じて居る。何を見ても些しも面白くない、何處を見ても些しも愉快でない。唯、一日も早く此處を逃れ度い、あの松の木の關を越えて、再び呼び返されない樣に成り度い、僕の心は、全く是等の感想で充滿に成つて了つた。

午後の演習は四時に終つた。例の將校が、

「演習止め！、兵營に向つて、自然行進！。」

と呶鳴つた。「演習止め！」、此言葉は非常に太い胴魔聲ではあるが、僕の耳には卓越したる洋琴家の演奏よりも心地善く響いたが、直ぐ續いて起つた、「兵營に向つて自然行進」と言ふ聲で、折角の快感も滅茶々々にされて了つた。

兵舍に歸つて、靴を脱ぐと、折角今朝一生懸命に成つて磨いた靴が、霜解の爲に泥だらけに成つて居る。傍に落ちて居た竹箆で、底や横に附着して居る、泥を搔落したが、それでもまだ酷く汚れて居る。泥が柔かな赤土だから堪らない。附いたが最後却々落ちない。僕は口の中で、

「赤土（曉）ばかり憂きものはなし。」

と言つたが、我ながら可笑しく思つて、獨りで笑つた。

室へ歸ると、角燈を取りに行つたり水を汲んで來たり、一しきり混雜ついた後、一寸小康を得たので、誰かゞ「酒保へ行つて見やう」と言ひ出した。すると皆其に贊成して一緒に出掛けた。酒保は實に殺風景な處だ。天井も何も張つてない。停車場の三等待合室と思へば間違はない。伽藍堂な建築物の中に、班で使つて居るのと同型の食卓が、十脚ばかり並べてある。其前で、色の眞黑な、殺風景な人物が、各自に、種々な物をバク附いて居る。蒸氣の立つて居る蕎麥の丼を、大切相に抱へ込みながら口を尖らしてちうちう啜り込んで居るのや、片手に汁粉の椀を持つて、片手に喰ひ切つた餅を箸で挾んで、口をもがくさせ乍ら、一心に其喰かけの餅を凝視めて居る者や、堅麵麭を食卓の上に置いて、拳骨でそれを叩き割つて、一片一片拾ひ喰ひをして居る奴や、今しも買ひ込んだ堅麵麭を帽子の中へ盛つて、空席を控

して居る輩や、其狀態は種々雜多であるが、要するに、此屋内に雜踏せる幾多の生物は、總て是れ食慾の滿足を得んとするに汲々乎たる者ばかりである。

「汁粉を二杯呉れえ。」

「蕎麥を三杯！。己の方が先でねえかい。」

「やい押すない！。」

「此野郎後から來やがつて太え野郎だ。」

恁んな種類の聲が間斷なしに起つて、場内は實に騷然雜然、殆んど耳を聾せんばかりである。僕は、肉的慾望の滿足に對する激甚なる競爭の淺間しき有樣を遺憾なく暴露せる此光景を見て、熟々人類の無價値なることを嘆じた。

二　酒保商人の暴慢

酒保の物品は、直接正金で買ふ事が出來ない。先づ切符賣下口に行つて、正金を

切符に換へなければならない。で僕も他の者も切符賣下口へ行つた。併し其處には二三十人の食亡者が詰めかけて居るので、僕のやうな氣弱な者には迚も買ふ事が出來ない。何も强て食ひ度いのぢやなし、止して歸らうかとも思つたが、併し只歸るのも餘り意氣地が無さ過ぎると思つて、前の者の背中へ附着いた。前の男は國井である。國井は却々元氣の善い男だ。どし〳〵人を押し分けて進む。僕はお蔭で苦も無く進める。

「小池君、しつかり附着いて來給へ。」

「はあ有難う。宛で餓鬼道と云ふ光景ですなあ。」

「冗談ぢやない、餓鬼道とは些と酷だね。併し寫實的生存競爭場だ。斯んな處では出來る限り自己の權利を擴張しなければ損だ。」

斯う言ひ乍ら、彼はどし〳〵と進んで行く。僕は、寫實的生存競爭とは變な熟語だと思つたが、其儘默つて進んで行つた。頗て賣下口に達した。宛どけちな停車場の

切符賣出口と同型である。

切符は國井が買つて呉れた。混雜を押し分けて漸つと所謂寫實的生存競爭場裏を離れると、

「さあ是が君の分だ。」

と言つて、國井は僕に、一枚の木札を渡した。受取つて見ると、是迄幾千人の猛者の手に嬲られけん、なんて書き出すと妙に趣が着いて來るが、又實際此一片の木札についても、想像さへ逞しうすれば優に一篇の小説も出來るかも知れないが、今は小説なんぞを書かうと言ふ樣な、大膽れた考へがあるのぢないから、單に其木札が手垢だか指垢だかに染められて、黑色の光澤を有して居たと言ふ事と、形が四角で兩面に「十錢」と彫り附けてあつたと言ふ事丈に止めて置く。此場合、僕もそれについて、深く想ひ廻らす餘裕は無かつた。

「君、汁粉を食つて見樣ぢやないか。」

と國井が提案したので、僕も其に同意して汁粉屋の前に立つた。却々混雜して居る。漸つと入れ換つて前へ出ると、丸太の手摺がある。それに握つて後から押す力に抵抗し乍ら、片手で、

「おい汁粉を」

と例の木札を出し乍ら言ふと、

「何杯？」

と尻上りの調子で鸚鵡返しを食つた。買ふのだか賣ふのだか、最と解り易く言へば、賣るのだか施すのだか解らない。是にも僕は驚いた。兵隊に成つちや丸で方なしだ。上官や古參に威張られるのは未だ幾分か諦らめの着く理由もあるが、恁んな酒保の奴や陸軍御用商人なぞ云ふ油蟲に迄威張られちや（而も金を出して買ふのに威張られちや）最う人格も何も滅茶々々だ。「恐らく此奴等も陸軍の御用を務めるまでには隨分無益な金を使つた事であらう。ナニ、賄賂は何處の國にもあるさ。一等國に限

つて無いと云ふ譯もあるまい。僕は暫時ではあつたが、恁んな事を考へ乍ら茫然して居ると、

「おい、早く爲無いかい。日が暮るぜ。」

僕は、全然努ッ氣を拔かれて了つた。

「二杯だ」。

僕が斯う答へるが早いか、突然、彼は片手に持つて居た木札を、强奪る樣に取つて、小さな二箇の朱椀へ、大きな銅の鍋の中に煮えて居る汁粉を、眞鍮の圓い杓子で手早く掬ひ取つて、小さな短冊形の燒餅を二片づゝ投り込んで僕に渡した。勿論盆などに乘せやしない。それから僕から强奪つた木札を一寸見て、傍の笊の中に投げ込んで、別に二箇の木札を返して遣した。是と同時に、國井も他の男から汁粉を二杯買ひ取つた。買ひ取つたは買ひ取つたが、後から後からと食亡者が詰めかけて居るので、却々出る事が出來ない。下手をすると折角買つた汁粉を溢す患ひがある。困

つたが仕樣がないので其儘靜かに後を向くと、安ずるより產むが易いとは此事だ。食つては旨いものだが、撒けられては始末の惡い物丈に、自分から押し退ける迄もなく、向ふでちやんと道を開いてくれた。僕は易々と人垣を出て、何處か空席をと見廻はして居ると、恰度直ぐ傍の一人が立つた。から其跡を占領して、國井はと見ると、之も向ふの方に腰を卸して居る。向ふでも此方を見て、互に笑顏を交換したが、兩者共其附近に空席を持たないので、其儘別々に食ひ始めた。

二二　斯くの如き者古兵也

僕の向側に一人の古兵が腰をかけて居た。正宗の四合壜を拔いて、蕎麥を肴に喇叭飲を遣つて居たが、最早大分聞し召したと見えて、眼の緣を眞赤にしてぢろりと僕を睨んだ。兵隊に似合はず、色の白い男ではあるが、一文字眉毛で眥が長く切れて、顏の輪廓が何方かと言ふと四角な方で、要するに、男振は好いが、意地の惡さ

うな相好だ。是が曇よりとした眼で睨みつけるのだから、睨まれる方は決して善い心持ぢやない。其中に彼は、蕎麥の空井と正宗の空壜とを互に輕く觸れ合せて、拍子を取り乍ら、小聲で何か俗謠を歌ひ出した。凡そ軍隊に於いて、新兵の最も畏怖する所のものは古兵である。彼等の最も多くは敎育なき輩である。敎育なきと言ふては、語弊があるか知れないが、兎に角品性が劣等である。麗はしい情操などは爪の垢程も無い。此の如き輩にして、而も新兵に向つては、實に無限の權力を有して居るのである。品性なく情操無くして、而も鎧ふに無限の權力を以てする。其結果や推して知るべしである。僕も此事は熟く知つて居た。僕が此事を知るに至つた譯は、曾て斯う言ふ事實を目擊したからである。僕が未だ中學に通つて居た時の事である。或日學校からの歸途、神田橋附近を通り掛ると、何やら大勢人集がして居る、立寄つて見ると、一人の兵隊を二人の兵隊が窘めて居る所である。而も其窘め方が通常でない。一人が右の頰べたを叩く。左樣すれば勢顏は左の方に向く。する

と他の一人が、

「左樣な姿勢を誰に習つた？」

と言ひ乍ら左の頰べたを叩く。また右を叩く。また左を叩く。斯んな事を、僕が見て居た間丈でも、各十遍程繰り返へした。都合二十遍叩かれた事になる。叩かれる兵隊の頰べたは、眞紅に成つて居た。而も其間叩かれる者は始終不動の姿勢で居た。叩く方の兵隊は筋が二本で、叩かれる方は一本であつた。僕は、譯は解らなかつたが、餘り處置が殘酷なので、石でも叩き付けて遣り度い程に思つた。恰ど其時、同級生の一人が同じく見物して居たので、其生徒から、其原因が過失の缺禮なる事を質し得た。それから、其叩いた兵隊等の行く方向と、自分の歸る方向とが同一だつたので、其後を踉けて行くと、彼等は恁んな會話を交換して居た。

「些と酷かつた樣だなあ。」

「ナーニ、已達だつて散々遣られて來たのだもの申し送だ。仕方がねえやな。」

「違えねえ、彼奴だつてまた來年に成りや、同じ事をするのだからなアハ、、。」

僕は驚いた。兵隊なんて實に野蠻極まる者だ。自分が打たれた意趣を。無關係な者に返濟する。實に陋劣極まつた精神だ。斯う成つては、軍隊の敬禮なんて、宛で弱い者虐めの道具に過ぎない。右の頰を打つて左へ向かせて置き乍ら、左樣な姿勢を誰に習つた！なんてまた左を打つなどは、宛で。盜賊をさせて置いて、何故盜賊を爲た！太い奴だ、と言つて牢に打ち込むのと同じ事だ。僕が、軍隊に於ける古兵の新兵に對する横暴理非不盡なる事を知つたのは、此時からであつた。

其謂所古兵なる者が、微薰を帶びて直ぐ眼の前に睨んで居るのだから、僕の身に成りや善い氣持は爲ない。僕は一杯の汁粉―と云つたつて、僅か二口三口で直ぐ空に成る樣な少量の汁粉だが、それを啜り干して更に他の一杯を取り上げやうとして、鼻先の古兵の顏を瞥と見た其瞬間、古兵の曇よりした瞳は、電光の樣に迅く僕の瞳の上に乘つた。僕は慌てゝ俯向いて汁粉を食ひ始めたが、何うも薄氣味が

惡くて仕樣がない。またぞろ徐りと顏を擧げると、また前の樣に睨まれる。併し第二回目の瞥見に於いて、僕は其古兵が、絕えず自分の肩章！卽ち白と赤との毛絲で緣をかゞつた、志願兵の肩章を睨んで居るのだと云ふ事を發見した。そして、其と同時に、其古兵の眼の中に燃えて居る、一種の嫉妬の情を認めた。で、匆々二杯目の汁粉を平げて、急いで其席を去つた。汁粉の味は、殆んど解らなかつた。玻璃窓を徹して射し込む覺束ない光を便りに、先刻汁粉屋から貰つた剩餘札を見ると、五錢と二錢とである。汁粉は一杯一錢五厘宛であつたのである。僕は安價いと思つ夫から今度は餡麵麭を食べて見やうと思つて、菓子を賣る所へ行つた。其處には、古兵が三人ばかり、大きな火鉢を取り圍いて、椅子に腰を掛けて股火をして居る賣る物は、堅麵麭、餡麵麭、饅頭、鑵詰、正宗、ビール、葡萄酒等である。僕つた。賣手が古兵で、買手たる自分が新兵の事であるから、宛で知事樣閣下の屬官が買物に行きでもした樣な形である。

二三　熊の樣な手

僕は何と言つたら善いのか、礑と當惑した。「何卒餡麵麭を七錢賣つて下さいまし」も可笑しい。餡麵麭を七錢呉れ」と言つたら怒るだらう。未開な地方へ行くと、買手の方から頭を下げて、賣手の方では威張つて居る所がある。門口で頬かぶりを除つて、

「眞平御免やして、何ともはや御手數でありますが、蠟燭を一挺賣つてお呉れなして。」

と、宛で乞食が物を貰はうとする樣だ。すると店の者が

「あいよ。」

と言ひ乍ら、蠟燭を一挺渡して遣る。すると客は其蠟燭を丁寧に推し戴いて、はぎ〳〵の財布の中から、孔の開いた錢を一枚々々丁寧に勘定して出して、

「はい大きにお有難う御座りやした。」

と言つて歸つて行く。商人は金錢を儲け乍ら威張り、威張り乍ら農民の膏血を絞つて居る。宛で御役人樣の樣である。だから、斯う言ふ習慣に慣れない土地の者が行くと、必定失敗る。横柄だとか、生意氣だとか言ふ評判が屹度立つ。其結果追放されて了ふ。僕が斯う言ふ地方の人民であつたなら、茲で菓子を買ふのも、格別面倒な仕事でもないだらうが、左樣で無かつた爲に困るのだ。するとそこへ一人の新兵が來て、

「堅麵麭を二錢下さい。」

と言つて木札を出す。一人の古兵が

「何？。堅麵麭だ？。幾何だ？」

と、のつそり椅子から立つて來る。

「ハッ、二錢であります。」

古兵は、何も言はずに木札を取つて、一寸其面を見て、傍の笊の中へ投り込んで扁平な大きな箱の中から、堅麺麭を六枚取り出して、

「そら。」

と言ひ乍ら渡して遣ると、新兵は、不動の姿勢で

「有難うあります。」

と受取つて行く。火鉢の傍の古兵等は、一齊に噴き出した。

「ぼや〳〵した兵隊ぢやねえか。」

僕は是を見て買ふのが嫌に成つた。併し酒保の木札及び物品は、酒保外に持出す可からずと張札がしてあるので、買つた札丈は使つて了ふか、若くは現金と引き換へなければならない。それも面倒だから、思ひ切つて、

「餡麺麭を七錢……」

後は何と言つて善いか解らないので、不得要領を利用した。不得要領も隨分便利な

事がある。今度は別の兵隊か出て來て何にも言はずに札を取つて、別の箱の中から半月形の餡麺麭を、三つ宛七度掴み出して、餡麺麭の山を築いた。

「入物を出せ！。」

僕は衣嚢から手布を出して渡した。古兵は一寸擴げて見て。

「こんな小さなものぢや駄目だ、帽子を出せ帽子を。」

と言ひ乍ら、前の手布を丸めて僕に投り付けた。僕は、失敬な奴だと思つたが、默つて帽子を取つて出した。すると古兵は、其帽子の中へ二十七箇の餡麺麭を浚ひ込んで、

「それ。」

と言つて僕に突き付ける。僕は、帽子の中に山と盛り上げた餡麺麭を抱へて、自分の席へ歸つて來ると最早他人に占領されて居る。すると、

「おい、小池君、此方へ來給へ。」

と呼ぶ聲がする。聲の方向を見ると、國井が居て、其隣が空いて居る。僕は急いで其所へ進んだ。見ると國井は、蕎麥の丼を四つばかり並べて、片端から平らげて居る所だ。

「何を買つて來ました?」。

「餡麵麭。」

と言ひ乍ら、帽子共其處へ置くと、

「やあ、澤山買ひ込みましたねえ、君一人で食ふのですか。」

と驚いた樣に言ふ。

「いえ、僕一人と言ふ譯ぢやないです。善ければ君も食つて呉れ給へ、恁んなに澤山呉れやしまいと思つたら、一錢に三つ宛ですから、二十一あります。迚も食べ切れやしません。」

併し心配するには及ばなかつた。

間も無く二人の前へ、のつそりと現はれた人物がある。それは例の上等兵だ。彼は恰度空いて居た向側の腰掛に腰を卸した。

「己も何か食うべえと思つて來て見たゞが、混雜で居て却々札が買へねえだ。小池志願兵、えら買ひ込んだゞなあ。一つ貰ふべえか。」

と、遠慮も何も有つたものぢやない、突然熊の樣な手を伸ばして、帽子の中から一つ摘み上げた。僕も國井も無論驚いた。併し上等兵は平氣である。自分でする事を驚く樣ぢや、迚も恁んな眞似は出來ない。

二四　餡麵麭は洋袴へ

「酒保の餡麵麭は、餡が少くて甘くねえだ。」

と言ひ乍ら上等兵はまた一つ摘む。而して薄い唇を飜して一口に頰張つて了ふ。僕は全く惘れて了つた。最早其行爲に關して、善惡美醜の判斷を下す餘裕を殘さない

程に惘れて了つた。それから何にも言はずに、三つばかり食べて見たが、旨くない。旨くない上に、斯んな醜悪な行爲を傍觀しなければならないので、其上食ふ事が嫌に成つた。聯想と言ふものは妙なもので、此時僕は、餡麵麭を食ふ事それ自身が、すでに醜悪な行爲である様な感じがした。間もなく食事喇叭が鳴る。酒保は是で閉ぢられるのである。汁粉屋も蕎麥屋も仕舞かける。兵隊等もぞろぞろと出て行く。今迄兵隊で揑ね返されて居た酒保内も、急に寂寥に成つた。

「上等兵殿、自分は最う歸ります。」

と言ふと、

「左様けえ、けんど此麵麭何するだい。」

と尋く、

「要りませんから、置いて行きます。」

と言ふと、上等兵は屹驚した様な顔をして、

「勿體ねえだ。そんちや己が貰つて行くべえ。」

と言ひ乍ら。十箇程殘つて居た餡麵麭を洋袴の衣嚢や上衣の衣嚢へ押込んで、

「さあ行くべえ。」

と立ち上つた。酒保を出ると、國井が僕の背を一寸突ッ突いた。そうして互に顔を見合はせて笑つた。

夜食は相變らず殺風景なものである。軍隊の飯は、飯らしい香味かない。冷飯なら無理も無いが、三度々々炊きたての飯である。然るに宛で飯の糟でも食ふ樣な氣がする。日本米の生命は、其獨特の香と味とにある。是が無かつたら、食つた事は無いが、南京米と大した違ひはあるまい。何故斯うなのだらう。南京米でもあるのか知ら?。それとも引割の量の多い爲か知ら?。僕は、恁んな事を思ひ乍ら、それでも半分程平げた。

夕飯が濟むと、食器番は食器番、舍内當番は舍内當番と、それ〴〵の任務に就い

て一しきり混雜した後、上等兵が、

「是から毎晩見習士官殿の學科があるだから、何處へも行かない樣に爲て居なけりやなんねえだ。」

と云ふので、皆例の通りターフルの周圍に集つて小さく成つて居ると、其處へ例の從卒が、箒を二本と冷飯草履を十足と鐵葉の金盥を三箇持ち込んで來た。兵卒は、麻裏草履やスリッパーは穿けない規定なのだ相である。寒中板の間を、薄い靴下二枚で過ごして居た身には、冷飯草履でも過ぎる程である。僕は、二枚合せの冷飯草履の上に冷切つた足を乘せた。絹布の座布團の上へ乘つたより心地善く感じた。放縱で贅澤な生活をして居る者共の眼から見れば、如何にも憐れな樣に見えるかも知れないが、然し其内に無限の教訓が含まれて居る。其教訓を直ちに味ふ事の能る者は、斯かる場合に度々遭遇した事のある者で、それは非常に幸福な人類であるのだ。平凡なる人類は、斯かる場合に、直ちに現在と過去とを比較する。そして徒に

現在を悲泣する。僕は、此時平凡な人間であつた。僕は其教訓を味ふべく、餘りに安樂に馴過ぎて居た。

二五　上官の氏名

暫くは、草履の分配と、箒金盥の處置とでごた〳〵して居た。

「箒や金盥の私物は、班に置く事が出來ねえだから、倉庫へ匿して置かなけりやなんねえだ。」

と上等兵が言ふ。一寸考へると矛盾して居る。第一自分で金錢を出して買ふのに何も文句は有りやしまい。それも風紀を亂す樣な物なら知らんこと、箒や金盥など買つたつて、格別障りにも成りやしまい。殊に箒は、室の清潔を保つ可き目的に向つて買つたのである、と斯う考へられる。僕も其他の者も、無論左樣考へた。併し金持は、それで濟むが金の無い者は困る。金があるからと言ふて、矢鱈に勝手な眞似

をさせたら、飛んだ結果を惹き起さないとも限らない。其處はお坊ちやん丈に、此處迄は氣が付なかつた。實際世間には、無智な金持が、自分勝手な振舞をする爲に、無智な貧民に、飛んだ罪惡を犯させる事が度々ある。併し大抵は氣が着かずに遣つて居るのである。だから智者は明瞭に其理由を示さなければならぬ。氣の着かなかつたお坊ちやんの僕には罪はない。罪は其理由を明瞭に示さなかつた上等兵にある。上等兵も大方知らなかつたのだらう。で、理由は兎に角として、匿さなければならない。

上等兵は、僕と加藤の寢臺を上げさせて、床を一枚引き起した。下に大きな穴が開いて居る。

「是から見付けられて惡い物は、皆此中へ隱匿して置くだ。」

と上等兵が言ふ。

二本の箒と、三箇の金盥は、其所謂倉庫の中へ姿を匿した。

暫くすると、前の晩の樣に、がたりがちやりの音が聞える。一座は思はず鳴を靜めた。上等兵は、其細い眼を輝かして入口の方を窺ふ。何の事はない、最初に打つ付けた警鐘の數を聞き損なつて、次の警鐘の音を待つ時か、若くは大地震の搖り返しを待つて居る樣な有樣である。音が愈々近づく

「オール」

と言ふ叫びが起つた。一同は皆一齊に起立した。敬禮が濟むと、

「其儘聽け。是から自分が毎夜學科を遣る。學科と言ふても、極めて簡單な事ばかりである。併し軍人と成るには、一通りは皆知らなければならない事であるから、其積りで確かり遣なければならん。で今夜は上官の官姓名を敎へる。」

と言つて、師團長、旅團長、聯隊長、大隊長、中隊長、及び中隊附將校、準士官、見習士官の官姓名及び尊稱を敎へた。成程簡單な事である。併し簡單な事が必ずしも覺えるに容易な事とは言はれない。最初聽いて居る間は、解り過ぎて困る位であ

るが。一人々々質問さるゝに及んで、我等は皆、我容易ならざることを發見した。師團長、旅團長位は大抵是迄聞いた事があるので、直ぐに想ひ出すことが出來るが、聯隊長、大隊長、殊に中隊附將校の姓名に至つては、迚も一時に覺え切れたものぢやない。從つて、中隊長の名を聞かれると、大隊長の名を答へたり、大隊長の名を聞かれると、聯隊長の名を答へたりする。それでも、一時間ばかりの後には、大抵覺え切る事が出來た。最後に、見習士官が、

「汝等の班長の官姓名は、何と言ふか……青柳志願兵。」

と尋ねた。青柳は言下に起立して、床も天井も拔げて飛び相な聲で、

「はい、陸軍歩兵伍長、鷲沼……」

と迄言つたが、名前を知らないので、うんと悶えた。が、すかさず、

「鷲沼伍長殿であります。終りつ。」

と遣つ附けた。併し見習士官は沈着いたもので、

「可けない。志願兵がそんな事ぢや、隣の兵隊に笑はれるぞ。自分の班長の名前位を知らない樣で何うする。室の入口にちやんと名札が掛けてあるぢやないか。誰か知つて居る者は手を擧げろ。」

と言つたが、生憎く誰も知つて居る者がない。

「上等兵、汝皆に敎へて遣れ。」

ターフルの端に小さく成つて居た上等兵は、立て、

「陸軍歩兵伍長、鷲沼種三郎殿、終りつ。」

と言つて坐つた。軍隊では、總て答解報告等の終に、「終り」と言ふ言葉を着る。

鷲沼の方は是で濟んだが、今度は又、

「汝等の上等兵の官姓名は何と言ふか、國井志願兵。」

と言ふ質問だ。僕は此質問を聞いて、思はずはつと思つた。何故なれば僕は一室に寢起しながら、未だ上等兵の姓名を知らなかつたので、若し其質問が自分に與へち

れたなら、大きに赤面しなければならなかつたのである。

二六　部屋の中が往來

併し國井は幸に知つて居た。

「はい、陸軍歩兵上等兵、間瀬太兵衛殿、終りつ」

志願兵の學科は是で終つたが、隣室の學科は却々終らない。教官は例の皮肉な見習士官、諸隈虎太と言ふ男で、生徒は、隣室の兵隊の他、一昨日入つた新兵が皆集つて居る樣である。各班から腰掛を徴發して來て、室内一ぱいに腰を掛けて居る。默つて聽いて居ると却々面白い。見習士官が意地の惡さうな語調で、

「聯隊長殿の官姓名を言つて見ろ。おい壺谷、貴樣言つて見ろ。」

「はい、陸軍大佐……末廣忠直殿、終りつ。」

「馬鹿ー、たゞ陸軍大佐で解るか。おい貴樣言つて見ろ。」

「はい、陸軍歩兵大佐、末廣忠直殿、終りつ。」

「おい、今度は貴樣言つて見い。」

妙に尻上りな、如何にも人を輕侮した語氣である。それでも兵卒は眞面目に、

「はい、陸軍歩兵大佐、末廣忠直殿、終りつ。」

「今度は、師團長閣下の官姓名……木内、貴樣言つて見ろ。」

木内は例の野呂間な聲で、

「はーい……陸軍歩兵中將……忘れました。」

「馬鹿ッ、將官に歩兵や騎兵があるか。善く聽いて居ないからだ。おい貴樣答へて見ろ。」

「はい、陸軍歩兵、、もとい、陸軍中將、秋田富雄殿、終りつ。」

「何だ、殿？。」

「、、もとい、閣下殿であります。」

「駄目だ、他に知つて居る者、手を擧げろ。……おい貴樣。」
「はい、陸軍中將、秋田富雄閣下、終りッ。」
「今度は、少佐と大尉と何方が上か、おい貴樣。」
「はい、大尉の方が上であります。」
「馬鹿つ、他に……おい貴樣。」
「はい、少佐殿の方が上であります。」
「斯う言ふ時には、尊稱は要らないのだ。いゝか、一番上が元帥、それから、大將、中將、少將、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉。それから、準士官 卽ち特務曹長、見習士官、下士。下士の中に、曹長、軍曹、伍長、と武官の階級は是丈に分れて居るのだ。そして、大將から少將迄が將官、大佐から少佐迄が上長官、大尉から少尉迄が尉官。是丈を總稱して將校と言つて、其下に、準士官と下士及兵卒がある。解つたか。それから、上官の官姓名を覺え切れない者は、班に歸つて上

等兵から習へ。上等兵、貴樣善く敎へて遣れ、終りッ。」

斯んな鹽配で隣室の學科は終つた。他の班から集つて來た兵隊等は、皆志願兵の室を橫斷して歸つて行く。集る時にも斯んな風にぞろ〳〵と通られたが、歸る時にも亦是で、加之皆じろ〳〵此方を見て行く。志願兵の身に成れば、餘り好い氣持はしない。殊に僕は、人一倍不快に感じた。今迄自己の爲に一室を獨占して、兩親の他は、如何なる者と雖も其尊嚴を侵す事を許さなかつた身の上であつて見れは、斯う遣つて遠慮も會釋もなく、宛で大道でも橫行する樣に、而も何處の馬の骨だか解らない奴（僕の目から見て）に橫行されては、堪え難く思ふのも無理はない。僕は、家の中に居る樣な氣がしなく成つた。

二七　金で買つた星章

日夕點呼迄には、未だ三十分程ある。志願兵は火の氣の無い火鉢を眞中に置いて、

晝の練兵の困難に關して會話を初めた。

「何うも自然行進には閉口するよ。」

「全く僕も往生した。」

「是れから先が想ひ遣られる。」

恁んな言葉が、各人の口を衝いて出て來た。中に一人、

「上等兵殿などのを見て居ると、實に樂々と行く樣でありますが。」

と水を向けた者がある。すると上等兵相好を崩して、

「そりや當り前のこんだあな、斯う成る迄には、面桶の數をお前達より千〇九十五本餘計に食つて居るだからなあ。何と言つたつて軍隊ぢやはあ、面桶の數餘計に食つた者にや叶はねえだよ。」

と頗る得意である。僕は、面桶が一寸解らなかつたので、尋ねて見度いと思つたが、燕口袋で懲りて居るので、最早軍隊では、如何なる事も質問しまいと決心して、此

時も默つて居た。併し自分で質問する迄も無く、他の者が質問して呉たので、それが毎日用ひて居る飯箱のことであることが解つた。上等兵は更に說き續ける。

「お前方の學問は、皆金で買つたのだ。金さへありやあ、何んな學校へでも入つて何んな學者にもなれるだらうが、軍隊ぢや左樣は往かねえだ。此肩章の星一つは百圓出したつて買へねえだ。斯うやつて三つ附ける樣に成るにや、生容易しい苦勞ぢやねえだからなあ。」

と、此處迄は實に意氣軒昂たるものがあつたが、國井が透かさず、

「併し上等兵殿、自分は百五圓出して、此星を一つ買ひました。」

と斬り込むと、先生ぐつと詰つて顏を赧くする。一座は下を向いてくすくす笑ひ出す。誠にお氣の毒な有樣であつたが、稍あつて、

「そりや左樣だけれど、是れから先は金ぢやねえだ。」

と、誠に不手際な受流しをした。僕は、「伍長迄」と思つたが、口へは出さな

た。國井も此上斬り込むことは敢て爲なかつた。併しそれから國井に對する上等兵殿の御覺は、甚だ斜に成つて了つた。要するに、軍隊は默するに限る所である。間も無く點呼に成る。室内を一渡り掃いて、加藤が其塵埃を捨てに行く。僕は室内に備へ付けてある喫霊の水を換えて來る。斯くして點呼の刺叭は鳴る。集合して鷲沼の來るのを待つて居る。間も無く鷲沼が來る。番號を附ける。殆ど前夜と同じ事を繰り返すばかりである。番號が濟むと、鷲沼が、

「點呼喇叭は、何と言つて鳴るか。吉田志願兵」

と、愚にも附かない質問をする。それでも上官の質問だから仕方が無い。吉田志願兵は、言下に姿勢を正して、

「はい、解りません。」

「それでは、小池志願兵。」

僕は、小供の時聞いた事があつたのを、知つては居たが、其を眞面目に答へるには

餘り大人に成り過ぎて居たので、

「知りません。」

と答へた。伍長は更に、

「誰か知つて居る者、手を擧げろ。」

と來た。すると、斯かる愚な質問に對して、進んで答解の名譽を擔ふべく手を擧げることを敢てした勇者が二名ある。一人は加藤志願兵で、他の一人は青柳志願兵である。伍長は青柳志願兵を指名した。青柳は大きな聲で、

「はい、トコトツタカ、トツタカ、トツタカと鳴ります。」

と答へた。伍長は、

「よ―し其通り。」

と言ふ。青柳は頗る得意がつて居る。他の者は笑ふ。僕は寧ろ感れに感じた。

靴と佩劍の音が聞こえる。階段の上の班で「オール」の聲がする。續いて番號を

附ける聲がする。それが濟むと、靴と佩劍の響が志願兵の室に入つて來る。前夜と同じ事を繰り返へす。

先是で苦しき一日が濟んだ。餘す所三百六十三日ある。「妾怨廻文之錦」君思出塞之歌」相想相望路遠」と嘆じた蕩婦が支那に有つたが、僕の感も亦是と同じだらう。併し歸るか歸らないか解らない遊子を十年も待ち焦れて、而も其先何時歸るとも知れなかつた時の蕩婦の感に比べて見れば、三百六十三日位は、物の數でも無いのであるが、其處がそれ人間の自己的なる所以で、迚も人の感に迄は成り切れないのである。僕は除隊の日を、茫漠たる未來に望んだ。

二八　精神的苦痛

間も無く消燈喇叭が響き渡る。兵隊等は皆夢の世界に急ぐ。僕も加藤も、一渡り室内を見巡つてから、頓て彼等の後を趁ふべく寢臺の中に潜り込んだ。併し僕は却

々眠られない。今日の現實界に於ける事件は、僕をして容易く夢の世界に遊ばしむべく、餘りに深い印象を僕に與へたからである。僕は夢の世界に入る前に先づ、過去と成つたる今日一日の世界に入つて見た。

今日の世界は苦痛の世界であつた。出て來た人物は盡く鬼の樣である。上等兵、伍長、見習士官、皆自分等に苦痛をのみ要求する。殊に伍長の如きに至つては到底言語に絶した動物である。最う少し譯の解つた人間から、否少なくとも自分以上の人間から、最う少し條理の立つた、成程と合點の行く樣な理由の下に打たれるのなら、決して無法とは思はないが、高が土百姓の、人を殺す事丈敎えられた他何等の品性も人格も薫陶されて居ない、半獸的の人類から、違法な理由の下に打たれるのかと思ふと、腦中は煮え返る樣に熱する。通常過去の追懷は、一種の愉快を伴ふものである。峻嶮を踏破する時の苦、怒濤を蹴破する時の苦、回顧すれば皆一種痛快の情を感ぜしむる者である。然るに、今日受けた苦痛は、回顧する度に一層苦痛を

増さしむる。何故であらうか。僕は獨り斯んな疑問を提出した。其に對して僕の思想は、左の如き答解を與へた。

「客觀的事象に對して、自動的に味ふたる、肉體的苦痛は、時の過經に從つて其快感を増すものであるが、他動的に與へられたる精神的苦痛は、永久に苦痛として存留する者である。是、一は肉體のみに關し、他は精神に關するものであるからである。前者にあつては肉體に受けたる苦痛は時の經過と共に消滅して、殘るものは、當時眼底に映じたる、自然界の壯觀と、能く其困苦に打勝ち得たりと言ふ自負の情のみである。然るに、後者にあつては、肉體に受けたる苦痛は消滅するとしても、其と同時に受けたる精神上の苦痛は、精神の存續する限り、永久に苦き記憶となつて存續するものである。今日受けた苦痛は、後者に屬するものである。從つて、如何に時間の經過を俟つとも、決して消滅するの時機はあるまい」是迄が答解ある。そして僕は猶思ひ續ける、「自分は不肖ながら、寧ろ進んで兵役に服した者である。

肉體的苦痛の如は、覺悟の上である。決して驚きはしない。併し、斯く迄酷しい精神的苦痛まで豫期しては居なかつた。豫期して居なかつた丈、それ丈苦痛は一層である。これから三百六十三日間絶えず斯かる苦痛に苦しめられて、且又將來思ひ出す度に是が怨恨の情を刺戟して、精神界の平和を攪亂するかと思へば、一層堪へ難い感に打れる。復讐は讃めた仕事ぢやない事は知つて居る。だから復讐し度いとは思はない。けれども、無法な迫害を蒙つて、其無法を悟らしむる事も出來ないで、其儘泣寢入しなければならぬと言ふに至つては、無神經な愚物か、さなくば釋迦や耶蘇の如き聖人に非ざる限りは、到底堪え切れたものではない。多少教育ある者で軍隊生活の經驗ある者は、皆其野蠻を非難するが、全く無理ならぬ事である。」と斯う考へ乍ら、僕は思はず熱い涙を流した。

二九　公德心なき古兵…痛快なる制裁

何時の間に寢たか、泣寢り入に寢入つて、翌朝は亦喇叭と共に眼を醒ました。東の空がほのぼのと白い。戰友と互に床を疊み合つて、日朝點呼を受けて、夫から釦を磨いて居ると、上等兵が來て洗面器を出せと言ふ。寢臺を引き立てゝ穴の中から洗面器を出して遣ると、上等兵はそれを持つて出て行つた。僕の寢臺は誠に都合の惡い所に在る。顏を洗ひに行つて見たが却々汲めない。小半時もかゝつて漸と釣瓶繩に捕まる事が出來た。汲み上げ樣とすると、一人の新兵が反對の繩を引き上げて呉れる。僕は、彼奴山分けにする積りだなと思ひ乍ら、せつせと汲み上げた。城の堀井戸だから却々深い。漸くの事で釣瓶が井戸側の緣迄上ると、新兵は先づ自分の洗面器に一杯注いで、其儘釣瓶を井戸端に投り出して行つて了つた。僕は怪しからん醜漢だと思つたが黙つて其釣瓶を此方へ引き寄せ樣とすると、横合から、一人の古兵が、ひよいと其水を盜まうとした。が其機先を制して更に横合から、突然古兵の手を掛けた釣瓶を奪つて、

「小池志願兵、洗面器を出し給へ。」

と言つた者がある。見ると山本志願兵である。僕は驚いて、暫時は古兵と山本の顏とを、等分に見比べて居た。古兵も驚いて山本の顏を見て居る。他の新兵共は無論皆愕然として居る。此の瞬間に僕は山本の偉大なる人格に打たれた。否僕のみではない。此時此處に在つて、此行爲を目擊した者は、皆彼の俠勇なる行爲の壯觀に打たれたのである。此瞬間の沈默は、落雷の壯觀に打たれた時のそれと全く同じである

山本は更に、

「早く出し給へ。」

瞬間の沈點は先づ是れで破られた。併し僕は、

「僕は可いから其人に遣つて呉れ給へ。」

と辭退した。蓋し僕は、山本の身に禍の及ばんことを恐れたのである。

此時迄默つて居た古兵は、突然拳を固めて、無言の儘山本の頰を目がけて打ちかけ

た。が、併し、山本は其拳が自分の頬に達する前に體を轉したので、拳は徒に釣瓶縄を打つたのみである。さあ事態頗る面倒に成つて來た。最早水どころの騒ぎでない。古兵は直ちに第二拳を送つた。併し山本は左の腕でそれを受け止めた。

「貴方は何の理由あつて人を毆打しますか。」

彼は冷靜に詰り掛けた。併し相手は、そんな事の解る人類ぢやない。

「何？此野郎、新兵の癖に生意氣な……。」

と更に第三の鐵拳を加へた。其拳を、前と同ぢ型で受けたと思ふ間に、彼は釣瓶縄を放し様、ひよいと體を捻つて。古兵を脊中に脊負ひ込んで了つた。そして次の瞬間には、古兵は、見苦くしも、大地へ仰向けに大の字形に叩き付けられて居た。其叩き付けられた時の音たるや、宛ど、大きな梱包を投げ出した時のそれと同じである。此騒ぎを見付けて、更に古兵が二三人駈けつけて、

「野郎生意氣な！」

と言ひ乍ら、兩方から打つてかゝつた。すると、投げられた奴も起き上つて來て、

「怎んな野郎此儘置いては、軍規が保てねえ。」

と、前後左右から詰め寄せたが、今の手並を見て居るので。早計には飛び着かない。そして誰か先へ一人飛び着いたら、それから自分も飛び着かうと互に思ひ合つて居るのだから、一寸は片が附かない。僕は、事が自分から起つて居るのであるから、迚も默つて見て居られなく成つた。で、前後の思慮も何も忘れて了つて、猛然として其活劇の一人に加はらんとした。併し此時、恰ど顔を洗ひに出て來た一人の將校が、此光景を見て駈けて來た。

三〇　將校の一喝

古兵共は目が眩んで居るので、將校の來たことには氣が着かない。三人で一人を圍んで居るのだから。善惡は直覺的に解る。將校は突然。

「貴様等は何を爲て居るか。」

と言ひ様、三人の頭を片端から一つ宛擲つた。古兵は驚いて見ると將校なので、徨てゝ擧手の敬禮をする。甚だ恰好の善いものでない。僕は肚の中で、

「態を見やがれ」

と叫んだ。

「貴様等は何だ。昨日や今日入營したばかりの者を、三人も掛つて虐める奴がある か。今日點呼後、皆我輩の室へ來い。」

と言つて、將校は行つて了つた。其將校は秋岡少尉であつた。是で一先づ落着したので、僕と山本は顔を洗つて室に歸つた。

兎に角、一年志願兵とは言へ新兵の身分で鬼より恐しかるべき古兵を投げたのだから、其評判は直ちに中隊一般に喧傳された。室へ歸ると、上等兵が突然、

「山本志願兵、お前は何だつてあんな亂暴をしたのだい。上官に向つて暴行をす

れば、上官暴行で衛戍監獄へ行かなけりやなんねえだよ。そしてお前許じやねえ、班長殿や己達の成績迄も惡く成るでねえか。これだからはあ、己一年志願に際くことは嫌だと言つたんだ。お前はハア、今に古兵さんから酷い目に會ふだ。己もう構はねえから、勝手にするが善いだ。」

と言ふ。併し山本は何とも言はなかつた。朝飯を食ふ時、他の志願兵等は皆原因を質問した。併し山本も僕も、何等の説明を與へなかつた。彼等の或者は、當時洗面所で顔を洗ふて居たのである。然るに、此騒動を見るや、皆狐鼠々々と逃げて了つた。殊に野間などは、山本が三人に詰められて居るのを、楊子を使ひ乍ら見物して居て、將校の影を見ると勿々顔を洗つて逃げて了つた。又一人は、食卓會議などには豪相な廣言を吐いて、嫌に傲慢な顔をして居乍ら、眞先に逃げ込んで了つた。斯んな頼り無い雑兵共だから眞面目に説明をする價値は無い。山本も僕も心から愛想を盡かして相手に爲無かつたのである。併し僕は、若し是が爲に山本が刑でも被る

様に成つたらと思う心配でならない。事が全く自分から起つて居るのだから。法律的には責任がないかも知れぬが、道徳的に、自分は確かに責任を負はなければなるまい。非は古兵に在る。いくら上官だつて、下級の者に屬した物品なら、横奪しても構はないと言ふ法はあるまい。部下は上官の命令に服從する代りに、上官は部下を保護しなければなるまい。併し相手は其樣事の解る動物ぢやない。此上は、唯先刻の將校、秋岡少尉殿の判斷に任せる許りだ。若不幸にして山本が罪を被る樣な事に成つたら、是非とも自分も其一半を分たなければならない。否、出來るならば全部を負つても苦しく無い。それにしても、何うしたら自分も其責を分つ事が出來るのか。僕が恁んな事を心配して居る間に、山本は平氣で卷煙草を吹かして居る。宛で何等心を勞するもの無きが如く泰然自若たるものである。色が飽く迄黑くて、筋骨が逞しくて、身の丈は五尺七八寸もある。平常は無口で、滅多に笑つた事さへない。僕は彼の泰然たる有樣を見て、聊か張合拔けのした樣な。併し何となく安心した。

樣な氣がした。そして、何時迄もくよくよ心配して居る自分が、何だか腑甲斐無い樣な感が起つて、從つて、えゝ儘よ、何うせ、成る樣に成るのだ。起らない先なら何うでも成るが、起つて了つてからは成る樣に成るのを待つより仕方がない。と斯う度胸を定めて了つた。

朝飯が濟んで掃除を終ふと、今度は上等兵が、

「小池志願兵、一體何う爲たんだい？」

と尋く。說明する甲斐は無いが、尋かれて見れば默つても居られないので、

「自分も委くは知りませんが、何でも古兵さんが山本志願兵を打たうとされたのです。それを山本志願兵が避けたので、古兵さんが轉倒んだのらしいのであります。」

隨分人を馬鹿にした答解である。併し僕の身に成れば、斯んな馬鹿に充分の說明を與へたとて、何等の効果があるぢや無し、却て山本志願兵が、生意氣だとか馬鹿だとか言はれるばかりだから、縱令不滿足の答解の爲に、上等兵の怒を買つた所で、

俠勇なる友の名譽を保護し得る方が、遙かに心地善い事だと考へたのである。勿論上等兵は、此答解で滿足はしなかつた。併し馬鹿丈に馬鹿にされたと言ふ自覺もないので、格別怒りも爲なかつた。自分の體温と同温度の湯に入れば、熱くも冷くも感じないものである。併し人間には己惚心がある。馬鹿でも馬鹿野郎と呼ばれゝば憤る。此己惚心を毀損しない樣にすれば、幾何も馬鹿の程度が側られるものである。僕は偶然に、而も巧に上等兵の馬鹿の程度を側ることが出來た。そして、此分では、彼の己惚心さへ傷けなければ、いくら馬鹿にしても心配ないと思つた。

三一　上官は檻の獅子

間も無く練兵が始まる。昨日と大した變りは無い。自然行進には、皆相變らず苦しめられた。休憩の時間に、僕は山本に向つて、

「君今朝は氣の毒でしたねえ。あれが爲に君に迷惑でも懸かると、僕は實に申譯が

無いですが。」

と言ふと、山本は、

「なあに君、心配しなくつたつて善いですよ。あゝ言ふ事をするのが僕の道樂なんですから。君、いくら古兵だつて、あんな無法をするのを見ちや、迚も我慢は爲切れないぢやありませんか。」

と言ひ乍ら、青い煙の中から、黑い笑顏を見せた。春霧の間から、富嶽を望む心地がして、僕は愈々其大なる膽力と、高き人格とに打たれた。」

晩の學科は、前夜の復習と其上に勳章の種類を敎へられた。勳章などゝ言へば、軍人が祭日か何かに胸の所にぶら下げて、是見よがしに光らかして歩くのは見た事があるが、金米糖の樣な形をしたのが勳八等瑞寶章であると言ふことゝ、あれが金鵄勳章であると言ふことを見分ける他は、何が何やら薩張譯の解らぬ連中ばか殊に僕の如きは、鉛のめんこ程にも有難くは思つて居なかつたので、

どとは思ひも寄らない事に屬して居た。それを學科などと大袈裟な名稱の下に、恁んな愚にも付かない事を覺えさせられるかと思ふと、聊か腹立たしい樣な、狗の肉だと知りながら、羊の肉だぞと無理やり口中に押し込まれる樣な氣がして、迚も眞面目に覺える氣に成れない。然し覺える氣に成れなくても覺ない譯には行かない。一度軍隊へ入つたが最後、蛇に見込まれた蛙の樣なものである。嫌も應も有つたものじやない。逃るにも逃げられず、されば と言つて死ぬ譯にも行かぬ。滿期に成る迄は死んだ積で働かなければならないのだ。

習ふ方は斯んな風でも、敎へる方は至極熱心なものである。「勳章には四種類ある。一ッは大勳位菊花章、次に旭日章、次が瑞寶章、此他に軍人のみに賜はる金鵄勳章。それで、大勳位菊花章は、國家に偉勳のあつたものに與へる處の勳章で、大勳位菊花大授章と、大勳位菊花章頸飾との二種類ある。旭日章は國家に勳功あつたものに賜はる勳章で、勳一等旭日桐花大授章、勳一等旭日大授章、勳二等旭日重光章、

勳三等旭日中授章、勳四等旭日小授章、勳五等雙光旭日章、勳六等單光旭日章、勳七等青色桐葉章、勳八等白色桐葉章、以上八種に分れて居る。瑞寶章は、勳一等瑞寶章から勳八等瑞寶章迄あつて、是は國家に功勞あつた者に賜はるものである。金鵄勳章は、戰時殊勳あつた者に賜はる勳章で、功一級から功七級迄ある。此他にまだ女にのみ與へられる勳章で、寶冠章と言ふのがある。是も瑞寶章と同じく勳一等から勳八等迄ある。」

見習士官は是等の說明を爲した後、猶、勳位に叙せらるべき者の資格の細別、並に勳章の懸方等を委しく講演した後、偖一人々々に就いて質問を始めた。

「吉田志願兵、勳章には幾種類あるか。」

「はい、四種類あります。」

「言つて見ろ。」

「はい、……金鵄勳章、……大綬章、……旭日章、……寶冠、……もとい……瑞

寶章であります。」

「大綬章とは何だ？」

「……」

「駄目だ、小池志願兵、汝言つて見ろ。」

「はい、……金鵄勳章。」

「うむ金鵄勳章。」

「……瑞寶章。」

「うむ瑞寶章。」

「……」

「何うした。」

「……解りません？。」

「解りません？。馬鹿め、今教へたばかりぢやないか。」

到々見習士官は怒り出した。

「貴様達は一體何だ。一年志願兵ぢやないか。それに何事だ。今教へたばかりの事を既う忘れて了ふなんて、一體貴様達は狡猾いのだ。普通の兵隊は何も出來ない代りに正直だ。從つて一生懸命に覺え様とする。覺えられなくとも覺え様として居る。然るに貴様等は覺えられる頭を持つて居ながら覺えまいとして居る。貴様等が左様言ふ精神なら、己の方にも考へがある。

見習士官は眞赫に成つて怒つた。軍隊で上官の怒を買つた程恐ろしい事は世の中に無い。宛で一の檻の中に獅子と一諸に住んで居る者が、其獅子を怒らせた様なものである。逃げ様にも逃げられず、宥め様は無し、只坐して其思ひの儘に任せるより他に手段は無い。唯獅子程獰惡で無いのが見付けものである丈だ。

三二　喧嘩の關係者

僕は考へた。何うせ覺えなけりやならない事は、何うしても覺えなけりやならないのだ。覺えたつて損にならないが覺えなければ苦しめられる。下らなく豪がつて自己が與へられたる刻下の運命に抵抗する事は、識者の執るべき方法でない。

見習士官は更に、

「此中に誰か覺えて居る者は無いか、有つたら手を擧げろ。」

此問に對して手を擧げる事を得た者は、山本志願兵一人のみであつた、彼は明確に答へて席に着いた。此答解の間僕は熱心に傾聽して居たので、直ちに覺へて了つた。再び見習士官の質問を受けた時には、完全に答へる事が出來た。併し中には隨分覺えの惡い者も居て、何時迄も覺えられなくて因つて居る者もあつた。

學科が濟むと間も無く點呼に成る。點呼が濟むと、秋岡少尉の從卒が來て、

「今朝井戸端で喧嘩を爲た關係者は、皆秋岡少尉殿の部屋に集れ。」

と言つて來た。皆と言つたつて山本と僕と二人しか居ない。山本は僕の同行を止め

たが、僕は强ひて同行することにした。部屋に入ると、例の古兵は皆集つて、不動の姿勢で立つて居る。部屋の隅には鐵製の寐臺があつて、兵隊の寢臺に同じ樣に赤い毛布が掛けてある。板壁に沿ふた棚の上には、本が二三冊重ねられて、其傍に大きな將校行李が横はつて居る。棚の下には、赤い條の入つた馬上提灯がひつ掛けてある。四方の板壁には、種々な表が張り附けてある。少尉は、中央に置いてある卓の上で、何かしきりに書いて居たが、暫くすると筆を擱いて、ぢろりと一同を

はし乍ら、

「最早皆集まつたか。」

と言ふ。古兵の一人が、

「はつ、皆集まりました。」

と答へる。少尉は、

「よし、休め。志願兵、汝等の官姓名を名乘れ。」

と言ふ。そこで、二人は。

「陸軍歩兵二等卒、山本光。」

「陸軍歩兵二等卒、小池誠一。」

と答へると、

「何？、二等卒？、馬鹿ッ、汝等は二等卒ぢやない、一年志願兵ぢやないか。」

「それでも鷲沼伍長殿から、左様敎へられました。」

と僕が説明すると、（コレモイケナイ）

「申譯はせずへもいゝ、汝等は唯二等卒の階級に居る丈だ。官姓名と問はれたら一年志願兵何の唯と言へばいゝのだ。」

と、少尉殿頗る不機嫌である。僕は、少尉が「馬鹿、一年志願兵ぢやないか」と言つたから、二等卒と言ふのは、自分の發明ぢやない、先輩にして且上官たる鷲沼伍長の敎へた儘述べたものであると言ふ事を説明したに過ぎないのである。何も

左様なに怒るにも當るまい。」と思つたが、言ひ爭つたとて効も無いので、不平乍ら其儘默つて居た。

（左様な理由で怒られる筈はない。何の理由でも成功しないソーだ。未だ君方が足りない）

三三　情ある少尉

やがて少尉は古兵に向つて、

「今朝貴樣達は何故、一年志願兵を虐めたか。」

と尋ねると、古兵の一人は、

「はつ、自分が、井戸端に行きますと、恰ど釣瓶の水の入つて居るのが井戸端に有りましたから、それを汲まうとしたのであります。すると此志願兵が横から其釣瓶を横奪りましたので、つひ志願兵を打たうとしたのであります。すると志願兵は無法にも自分に抵抗して、自分を擲げましたので、肥田と内山とが見兼ねて自分に助勢して呉れたのであります。」

と答へた。僕は、水を汲み上げた本人が居る前で、よくも斯んな嘘が吐けたものだと、憫れて其男の横顔を眺めて居ると、

「志願兵、それに間違無いのか。」

と少尉が山本に尋ねた。山本は嚴肅な語調で、

「否。左様ではありません。自分が井戸端に行きました時、小池志願兵と今一人他の新兵と二人で水を汲みまして、新兵が先づ自分の洗面器に水を汲んで、其儘釣瓶を放げ出して行きましたので、小池志願兵がそれを取らうとしますと、此人が横取を爲やうとしたのであります。自分は是を見ますと、激昂の餘り前後を忘れて其桶を取つて小池志願兵に渡さうとしたのであります。すると此人が自分を生意氣だと言つて打ちましたから、最初は避けましたが三度目には止むを得ず投げたのであります。すると今度は三人して自分を打たうとしかけました所へ、少尉殿が來られましたのであります。」

と答へると、少尉は

「小池志願兵、それに相違無いのか。」

と尋ねた。僕は、無論

「それに相違ありません。」

と答へた。少尉は少時沈思した後、古兵に向つて、

「今志願兵の言つた所に依ると、水は志願兵が汲み上げた様だが、何うか。」

と尋ねた。流石の古兵も、現在汲み上げた本人の居る前で、自分が汲んだのだとは言ひ兼ねたと見えて、暫く默つて居たが、少尉が更に、

「それとも汝が汲んだのか。」

と尋かれたので、止むを得ず、

「左様ではありません。」

と答へた。少尉は隙さず、

「それでは誰が汲んだのか。」

と斬り込むと、彼は遂に、

「志願兵が汲んだのだ様であります。」

と答へた。すると少尉は大喝一聲。

「馬鹿つ！汲んだのだ様だとは何だ！軍人がそんな不淡白で何するのか、先刻貴様は何と言つた。釣瓶が井戸端に在つたと言ふたぢやないか。何故其時に志願兵の汲み上げた釣瓶と言はなかつたか。貴様の言語は詐欺に亘つて居る。上官を欺かんとしたものである。そればかりぢやない、汝等は上官の命令を奉じない。不屈至極の奴等だ。新兵の入營前に、中隊長殿から何と訓示されたか。忘れる筈はあるまい。兎に角此儘には濟まされないから、中隊長殿に上申する。今夜は是で歸れ。」

古兵等は青く成つて出て行つた。少尉は更に志願兵に向つて

「志願兵、汝等はまだ入つたばかりで、軍隊の樣子は知らないのだから仕方がない

が、兎に角一段でも階級の上の者に對しては、縱令如何なる事があつても、決して抵抗を爲ては成らん。今度の事は、無論古兵が惡いには違ひないが、それでも彼等は上官である。從つて彼等の爲る儘に成つて居らにやならん。若し事が餘りに無法であつたならば、後から相當の順序を經て申し出で來るが善い。軍隊は軍規と秩序とで維持されて居るものであるから、如何に自己に正當の理由があつたにしても、秩序を破つた仕方は決して許さるべきものでない。今度の事は、汝等の無經驗に起因したのであるから、我輩は深く咎めはしないが、是から後は大に注意をしなければならん。山本志願兵の處置の如きは、我輩の大に感服する所ではあるが、只秩序を破つたと言ふ點が甚だ宜しく無い。將來再び斯う言ふ事の無い樣に注意をしろ。善し班へ歸つて早く寢ろ。」

朝から僕の心を勞はして居た事件も、何事も無く解決されたので、僕は安心して寢に就いた。

寢臺に就くと、例の通り種々な事を考へ出したが、晝の疲勞で何時しかうとうと成つて、魂魄今や五體を離れて將に夢の世界に入らんとする一刹那、遽然として起つたけたゝましい喇叭の響の爲に、魂は再び知覺の上に逆戻りをした。

三四　不時點呼

「兵隊等起きろ！。不時點呼だ、急いで服を着て寢臺の前に列べえ。」

上等兵は斯く呶鳴り乍ら、急いで服を着けて居る樣である。僕は、不時點呼と不時呼集とを間違へて、慌てゝ寢臺から飛び降りたが、月は有つても部室の中は薄闇いし、加之寢入りがけを不意に起されたので、尠からず間誤付かされた。

「今夜の舍内當番は誰だあ！。何故早く燈火を點け無いんだい、馬鹿っ！。」

上等兵は一人で猛り立てゝ居る。併し寢たら最後、近所に火事が有つたつて、却々急には起きられ相も無い樣な眠い盛りの連中ばかり揃つて居るのだから、目が醒

めた丈でも見付けものだ。却々角燈の事迄氣の着くものぢやない。それでも何うやら皆服も着る。舍内當番は角燃を點ける。各自の寢臺の前に列ぶ。斯くして點呼の準備は出來た。隣室の兵隊はと見ると、是は却々の騒ぎである。洋服などは、產れて以來曾て手に取つて見た事も無いと言ふ樣な連中も尠なくないので、迚も無事には着終る事が出來ない。僕は家に居た時分、不時呼集を食つた新兵が、上衣の袖を足に穿いたので、慌てた拍子に篏た事は篏つたが、脱ぐ事が出來なく成つて、止むを得ず繼目を切つて脱いだと言ふ話を聞いた事があつたが、今其話を思ひ出して新兵の有樣を見て居ると、道がに上衣を足に穿く程の粗忽家も無いが、袴下の前後を取り違へて急き込んで居る者は大分あつた。

僕は此先何をされるのかと思つて立つて居たが、別段何事も無い樣である。其中に上等兵が番號を附けさせる、續いて各室でも番號を附ける聲がする。暫くすると、鷲沼伍長が例の通り麻裏をぺた附かせて入つて來る。すると上等兵が、日夕點呼の

時と同じ樣に點呼を行ふ。

「今夜も脫營した奴があると見えんな。」

と伍長が上等兵に言ふと、

「はつ、左樣だ樣であります。」

と上等兵が應へる。僕には何の事だか譯が解らない。樣は不時呼集だと思つて居るのだし、不時呼集の時には、成丈手早く武裝して敵に抗し得べき準備をするのだと聞いて居たのであるから、斯うやつて何時迄默つて立たされて居るのは、不審に堪えないのである。劍も吊らず鐵砲も持たない中から、はや不時呼集の事など考へるとは餘りに輕早に失する樣ではあるが、併し入營早々から最早軍人に成つた積りで喇叭の音に飛び起きて、敵に抗する事を考へるなどは、頗る可憐な且賴もし所があるではないか。(リ精神アリテ今迄ノ悪ロイ所ガ已ニモ一年志願兵ダケ兵士樣ニゲキ腐レ魂ヲ持ツ。又オレモソーダヤー、

三五　食器番

「斑長殿、今の喇叭は何でありますか。」

と志願兵の一人が尋ねた。

「うーむ、今の喇叭か、あれは不時點呼の喇叭だ……」

と伍長が答へて居る間に、がた〳〵と靴の音が聞えて、階段の傍の班では、「オール、……番號！」の聲が起る、間も無く靴の音は志願兵の室に來る。此處でも亦「オール」と「番號！」とが繰り返されて、靴の音は更に隣の室に行つた。靴の音の主は秋岡少尉で、日夕點呼の時と同じく赤い條の入つた提灯を持つて、其後に例の軍曹が隨つて居た。將校が去つて了ふと、伍長は眠そうな聲で、

「よし、分れつ。」

と言つた儘出て往つて了つた。

「分れ！おいつ、早く寢ろ。」

と言ひ乍ら上等兵は急いで上衣とズボンとを脱いで、寢具の中に潜り込んで了つた。僕も急いて其の後を趁ふた。一時騷然たりし兵舍内も、何時しか閑寂たる天地と化した。

翌朝起ると、此日僕は食器番に當てられたので、他の二人の當番と一緒に炊事場に行つた。炊事場は各大隊に一つ宛附屬して居る。聯隊は三箇大隊から成つて居るのであるから、炊事場も三ヶ所ある。僕の中隊は第一大隊に屬するので、第一大隊の炊事場に行くのである。國井志願兵が、酷い所だと敎へて呉れたが、何んな所かと思つて行つて見ると、眞實酷い所である。奥行四間幅十間程——と言つては甚だ變であるが、兎に角粗末な機械工場の樣な平屋の建築物で、其内部が又三室に分割され、一部では湯を沸し、一部では飯を炊き、他の一部は菜を煮る所に成つて居る。飯は此建物の裏で渡されるので、食器番に當てられた新兵は、皆裏へ來て待つ

て居る。板壁に倚りかゝつて立つて居る者、踞んで居る者、皆便り無さ相な、寒さうな、窮窟相な顏をして居る。

此時突如として牛の吼える樣な聲が炊事場から起つた。

「此野郎太え野郎だ。何中隊の兵隊だ。」

僕の迷想は破られた。窓から覗いて見ると、鬼の樣な兵隊が三人、穢い軍服の袖を二の腕迄捲り上げて、一人の新兵を取り繞いて居る。其人相の惡さ、色の黑さ、宛で印度人の蒸汽の鑵焚見た樣な奴等である。是が帝國の軍人かと思ふと、軍人と成る事は餘り名譽でも無さ相である。彼等は神樂坂下や三河町邊に立つて居る立ん坊と五十歩百歩だ。而も彼等は自分より古參で而も上官である。自分は何處迄も彼等に服從すべき義務を持つて居る。僕は何う考へても自分の地位が殆んど立ん坊以下に迄下落したとより他考へられない。

「貴樣一體誰の許可を得て此火を持て行くのだ？。」

一人が眼を瞋らし腕を扼して詰め寄つた。立ん坊と選ぶ所は、唯其言葉が少々生意氣である。

見る〳〵新兵の足下には、志願兵室に在ると同じ樣な鐵胴の火鉢がある。古兵の一人は筋張つた黑い手に十能を握つて居る。全體の光景から推察すると、此新兵が無斷で火を持つて行かうとしたものらしい。新兵は何も言はないで震へて居る。勿論不動の姿勢で……。

「誰から貴樣賴まれて來た？。」

十能を持て居る古兵が尋つた。

「はつ、上等殿から命令されました。」

と新兵は恐る〳〵答へた。

「何だ？、上等兵から命令された？ 馬鹿歸つて上等兵に左樣言へ、炊事の火は上等兵に遣る爲に起すのぢやないつて。とつと丶歸れ。」

殘酷な古兵等は、斯くして爐の一片だに與ふることなしに、憐れなる新兵を追ひ出して了つた。新兵が火鉢を抱えて悄然と出て行くのを見乍ら、古兵は心地善げに打興じて居る。

「何うだい、ぼや〳〵した兵隊ぢやないか。何中隊の兵隊だい。」

「何中隊の兵隊だか貴樣追駈けて行つて尋いて見ねえ。」

「此野郎、馬鹿にしやがるない。時に日曜は何日だい、早く外出して奴に會ひていなあ。嘸待戀れて居やがるだんべえからなあ。」

「ウフ……、笑はしやがらあ。手前の面を見ると癪を起すと言つてたぞ。眞實手前の面は、女の癪には適藥に出來上つて居るからなあ。」

「此野郎……」

と言ひ乍ら適藥面は、袤え立つて居る大鍋の中から、柄杓に一杯湯を汲んで、打ち掛け相な氣勢を示したので、一方の兵隊は笑ひ乍ら慌て丶外へ逃げ出した。僕は彼

等の粗野なる有様を見て熟々情無い事だと思つた。

三六　生半かな江戸辯

其中に上等兵が遣つて來た。

「飯は未だ渡さねえかい。」

「はい、未だであります。」

志願兵の一人が答へる。上等兵は其儘炊事場の中へ入つて、古兵が五六人圍繞いて居る大火鉢の傍へ寄つて、彼等の仲間に加はつた。

『間瀬、何うだい、手前今度志願兵附に成つた相だが、旨く遣りやがつたなあ。志願兵なら世話も燒けめえし。會には旨え事もあるだらう？』

『駄目だ、志願兵だなんたつて、何にも出來やしねえ。ハア生意氣計り先に立つて、始末に終ええんだ。昨日の朝も中隊の古兵と喧嘩をして、昨夜點呼後秋岡少尉殿か

ら、うんと寫眞を取られた樣だつた。何でもびんたの十宛も喰つただんべえ。」

「うーむ、隨分生意氣な奴が居やがんなあ。何だせ、那麼な奴はぎう〳〵締め付けて遣らねえと、始末に終へなくなるぞ。己なら生かしちや置きやしねえんだが。」

「己も是から確かり遣んべえと思つて居るだ。」

上等兵は勝手な事を、勝手に尾鰭を付けて喋り散らして居る。殊に「びんたの十宛も喰つただんべえ」に至つては、寧ろ振ひ過ぎて居る。併し此上締め付けられては堪らない。彼等の樣な半獸的人類であるから、何んな無法をするかも知れない。僕は、犬糞的後讐期の愈々切迫せる事を感じた。彼等の會話の中で、僕の耳に新しく響いた言葉は、「寫眞を取られた」と言ふ句である。道の文學士も斯う言ふ言葉には一向馴染が無い。從つて何の事やら解らぬ。人間と言ふ物は、解らん事を其儘に濟ます事の出來ない性癖を具へた動物である。是あるが爲に進歩もするが、また要らぬ苦勞も餘計にする。解らん事を其儘に濟まして置く事の出來る人類は、餘計

な苦勞をしない點に於て幸福である。僕は餘計な苦勞を一つ儲けた。社會に居る時は、解らぬ事は尋ねれば解るが、軍隊に在つては迂濶尋ねる事も出來ない。從つて解らん事は其儘に濟ますより他はない。僕は止むを得ず諦めた。火鉢の傍の一群は誰が持つて來たのか、各自に焦げた握飯をうま相にばく付いて居る。愈々以つて立ん坊だ。

「飯を分配するぞ！」

と誰かゝ叫ぶ。上等兵は、彈かれた樣に立ち上つて、

「志願兵一緒に來う。」

と先に立つて別の戸口の方に行く。片手を衣囊の中に入れて、片手で殘りの握飯を嚙り乍ら。他の兵隊等もぞろ〳〵と集まつて來る。飯は炊事場の一番外れの入口で渡されるのである。入口に大きな卓が四脚並べてあつて其上に飯桶が山の樣に積んである。

「第一班三十本」

と一人の上等兵が手帖を見ながら言と、炊事の兵隊がそれを渡す。上等兵はそれを跟いて來た兵隊に運ばせる。斯んな風にして食器の授受が行はれるのだから、却々容易でない。僕等は可成長い間待たされて、漸と十一本の食器を受取る事が出來た。志願兵の一人が積み重ねた食器を抱え込むと、炊事の兵隊が澤庵の切を一握其上に載せて呉れた。飯桶を受取つて了ふと、今度は汁を貰ひに行く。汁は中の室で渡されるのである。上等兵は其入口に立つて、「此中に入ると、自分達の班の名前の書き付けた桶が二本あるから、一人が其一本の桶に汁を貰つて、今一人が隣りの室へ行つて湯を貰つて來るのだと言ひ殘して出て行つて了つた。

僕は汁を渡す室に入つて、桶が何處にあるかと思つて、怖々〳〵乍ら瞰回はして居ると、

「やい志願兵、何をぼや〳〵して居やがるんだい。馬鹿野郎。何中隊だ？」

と一人の荒くれた古兵が、金壺眼を光らせ乍ら呶鳴るので、僕は一縮みに縮み上つて了つた。僕が縮み上つたのは臆病な爲ではない。人が大きな犬に吠へられると、慄然とするものである。併し敢て犬が怖ろしいからばかりぢやない。犬なぞと喧嘩して、假令勝つて見たとて、名譽ではないし、負けでもすれば怪我をした上に人に笑はれなければならない。若し犬に勝てば、無上の榮譽を博することに定つて居るか、若くは尠なくとも犬と喧嘩することが、男子たるものゝ光榮であるならば、人は犬に吠えられゝば喜んで是に相應ずるだらう。僕にして見れば、僕は古兵を犬程にも思つて居ない。從つて彼等の咆號を犬のそれより一層恐ろしく感ずるのである。

「はつ、第三中隊であります。」

と不動の姿勢で答へると、

「何だ？第三中隊だ？此處に在るぢやねえか！馬鹿野郎！。髯なんぞ生やしやがつて何でえ、手前の目玉は節穴か。」

と言ひ乍ら、澤山列んで居る桶を、二つ三つ引くり返して見て「第三中隊志願兵」と書き附けてあるのを二本投り出した。桶こそ善い面の皮である。罪も無いのに投げ付けられて、たゝきの上を二三度轉がつた。

此古兵の言葉は、「馬鹿野郎」と「何でえ」とで持ち切つて居る。生半可に東京へでも出たと見えて、妙に江戸子がつて居るが、附燒刃は爭はれないもので、意氣な江戸子が使ふ樣に、輕く綺麗に出て來ない。溝泥でも押し出す樣に、穢く重く出て來る。僕は尠なからず是に當てられて、這々の體で逃げ歸つた。

三七　汚い食器洗ひ

朝飯が濟むと、分度は食器を集めて洗ひに行く。炊事場の直裏に大きな堀井戸が二つある。其傍に直徑四尺もある大盥が三つある。食器殼は此中で洗はれるので

ある。僕が食器殼を運んで行た時には是等盥は皆他の兵隊に占領されて居た。仕方がないから僕は默つて待つて居乍ら彼等の洗ふ樣を見て居たが驚いた。彼等が面桶を洗うに繩切れを丸めたものを用ゐるが、其繩切は特に準備されたものではなくて、其附近に落ちて居る繩 — 卽ち井戸邊の泥濘の中で、散々大勢の靴の下に踏み付けられたものを丸めて造るのだ。其靴では、便所へも行くし、犬馬の糞も踏むだらうし。多い中には人糞を踏んだのもあるだらう。其靴で踏まれた泥だらけの繩で洗ふのだから堪らない、僕が恐愕したのも無理のない事である。暫くすると、盥の中の水は汁粉の樣に成つて了つた。先の組が洗ひ終つたので僕が其盥の水を捨て樣とすると、他の志願兵が、

「おい小池、何故其水を捨るんだい？」

と詰る。

「何故つて君、餘り汚いぢやないか。」

「汚くたつて構はないんだよ、誰も汲み換へる者なんざあありやしないさ。」

他人が汲み換へないから自分達も汲み換へないとは、理由に成つて居る樣で理由には成つて居ない。併しそれでもと言ひ爭つて汲み換へる事は餘り大人氣無い。世の中には、理由にも成らない事を理由にして、其理由に服從しない者を稱して馬鹿と呼び、或は常識の無い奴と誹る者が非常に多い。いや大部分は皆是である。結局人と言ふ動物は、多くの場合論理に叶はない理由らしき理由を理由と心得て、それに從つて豪がつて居る生物である。常識とは多くの場合、論理に叶はない理由に服從することゝなる。僕もまた此多くの場合に當て嵌る人間である。從つて水は汲み換へなかつた。併し決して好い氣持ではなかつた。洗ひ終ると、他の組が又其盥に面桶を投げ込む。恁んな風ぢや全大隊が洗ひ終る頃には、水は何んなに汚く成なつて居るか解らない。

斯くの如くにして洗ひ上げた面桶を、先に受取つた所へ持つて行くと、炊事當番

の古兵が意地悪く一々點檢して受取る。若し、其中に一粒でも飯の着いて居るのがあると、全部もとへを喰はせる。元々泥水で洗つた面桶だから、飯粒の一つや二つ着いて居たとて何の事は無いのであるが、古兵なぞと言ふ奴等は、新兵でも箸めるより他に樂みが無いものと見えて矢鱈に意地の悪い眞似をする。宛で赤ん坊の手を拗ぢ上げて蒙がつて居るのと同じ事である。彼等だつて、赤ん坊の手を拗る事が卑劣で殘酷な行爲であると言ふ事位は知つて居るに違い無い。然るにそれと同じ行爲をして耻ぢない。而も豪がつて喜んで居るのは、詰り彼等の教育が不充分だからである。精神教育が不足だからである。類推力が足らないからである。軍隊教育なんて、人を殺す事ばかり專門に教へないで、些と無教育な者に、人の人たる道も序に教へて遣つたら善ささうなものだ。將校なんて、劍を吊つたり、馬に乘つたりして威張つて居るばかりが能ぢやあるまい。僕は、器食の始末を終へて、凍り付く樣な指を卷煙草の火で炙り乍ら、斯んな事を考へた。

間も無く練兵が始まる。前の日と同じ樣に締めつけられる。午に成るとまた飯を取りに遣られる。あの汚い水で洗つたのだと思ふと、何と無く胸に閊える樣な氣がする。併し食はなければ午後の練兵が出來ない。飯が汚くて食はなかつたから、それで腹が空つて練兵が出來ませんで通る所ぢやない。仕方がないから食ふ、併し考へると胸が詰る。成る丈箱に接して居ない所を食ふ樣にして、何うやら八分通り平げた。食つて了ふと直ぐ洗ひに行く。歸つて來ると直ぐ練兵に出る。斯んな風で些しも休む暇が無ない。

三八　新兵の敬禮

午後の練兵が終る時分に、敬禮法を教へられた。僕は地方に居た時分、兵隊が行き違ふ時に互に手を擧げ合つて行くのを見た。また姉の兒が物心の附く樣に成つて、「失敬」と言はれると、楓の樣な手を小さな額に持つて行つて笑ふのを見た。要

するに僕は、軍隊の所謂「敬禮」地方の所謂「失敬」なるものは、單に挨拶に過ぎないものである、帽を取つて丁寧にお辭儀をするのは面倒だから、一寸手を翳して之に代へるのだと考へて居た。然るに今日敬へられる敬禮は、何うして何うして、却々そんな簡單なものぢやない。

先づ始めに行進間の敬禮を敬へられる。行進間の敬禮は、途中上官に出會つた時行ふ敬禮である。先づ上官の位置を距ること約六歩の所に來たときに、確實に頭を上官の方に向けて、それから右手を帽子の庇の側方に擧げるのであるが、それが却々六ヶ敷い。頭が確實に向かないとか、右手の開き方が適當でないとか、手頸が曲り過ぎていけないとか、手の平の俯せ方が良くないとか、種々の小言が出て「可し」と言はれる迄には容易な事ではない。次に停止敬禮を敬へられる。此敬禮は、直屬上官但し將校以上に對して行ふ敬禮で、是も上官を距る六歩の所で行ふのだが、字の如く停止して行ふ點が前の敬禮と異つて居る。是が亦却々面倒だ。行進間の敬禮

には姿勢は八釜敷く言はれなかつたが、今度は停止した時の姿勢迄八釜敷く言はれる。僕は終に馬鹿馬鹿しく成つた。軍曹や曹長、殊に將校の敬禮を見ると、宛で成つて居ない。甚しきに至つては、置物の招猫然たる手付のさへある。然るに我々に對してばかり斯う面倒な要求をするとは、實に矛盾の極である。新參の吾々に對して斯う嚴格に要求するならば、古參者又は上官たる者は、一層確實に行ふべき筈である。古參となり上官と成つてからはあんな敬禮で宜いのならば、新參の吾々だつてあんな敬禮でよさ相なものだ。あんな敬禮なら、何もこんな面倒な思ひをして習はんでも結構やつて見せる。僕は此矛盾の點を發見したので、自分の遣らせられて居る事が馬鹿々々しく成つたのである。

間も無く日曜が來る。日曜には外出して大に英氣を養ふ必養がある。併し一日茶屋小屋で暮す事は不可能である。營内に兵卒娯樂所なるものはあるが、實に殺風景極まるものである。前に酒保の構造を述べた件に、その内部が三等待合室に酷似し

て居ると言ッたが、兵卒娯樂所の方は、田舍而も北越方面の小停車場の一二等待合室に酷似、どころか全く一致して居る。中央の卓の上には、つまらない雜誌や新聞が二三種置いてあるばかり、外に何一つとして、眼を喜ばしむるものも、腦を樂ましむるものもない。せめて長く成つて寢られでもすればだが、板壁に沿ふて張り出された板張の腰掛ぢや、馬鹿々々しくて掛けて見る氣にさへなれぬ。僕は入營の日此娯樂所なるものを窺いて見たことがあるが、其餘りに人を愚弄することの甚しきに憤然とした。其時ばかりぢやない今でも憤慨して居る。僕は斯う思つて居る。

「兵卒だつて人間だ。人間である以上は偶には極めて放縱な空氣に浴する必要がある。總ての規律、總ての制裁から脫して、思ふ儘に自分を放任する必要がある。自分なるものが、相當に敎育あり、思慮あり、修養あるものであつたなら、如何に放任されたからとて則を超ゆることなど餘り有るものでない。吾々は斯うやつて毎日苦しい練兵に膏汗を絞つて居る。起きるから寢る迄、寢るから起る迄、實に四六時中

心の休まる暇はない。常に、善く言へば嚴格惡く言へば冷酷なる軍規に縛られて居る。造次にも顚沛にも戰々兢々として、軍規に觸れざらんことをのみ希うて、寸時も心の休まる暇はない。隣室の一兵隊は、換靴の掛方が左右不揃なりしの故を以て、寢たのが態々起こされて、御丁寧にびんたまで喰つた。僅か靴の掛方位でびんた迄喰はせる程それ程嚴格な規律の下に起臥する身には、せめて一日に一時間位の放縱の時間を與へても善さ相なものだ。併し與へられたにしたところで、兵卒娯樂所などでは迚も駄目だ。十人も入れば一杯に成つて了ふ。而も解らずやの古兵などに跋扈された日にや十分間も持てない。娯樂なんて名を附ける丈癪に觸る。宛で羊頭を掲げて狗肉を售ると言ふものだ。

三九　皿屋敷のお菊

けれども兵士の娯樂所が毫も娯樂所たる意味を有せないと云ふ僕の考は、論理上